

海外平安文学 研究

ジャーナル 6.0

Journal of Heian Literature Research Overseas Vol.6.0



伊藤鉄也 編

<謝辞 Acknowledgement >

本研究は JSPS 科研費 25244012 の助成を受けたものです。

This was financed with JSPS KAKENHI Grant Number 25244012.



あいさつ

2013年にスタートした本科研の課題も、2017年3月をもって無事に終えることとなりました。

この間にご協力いただきましたみなさまに、心よりお礼申し上げます。

その成果物としてのオンライン版『海外平安文学研究ジャーナル』(ISSN:2188-8035)は、今回の6冊目で最終号となります。2014年秋に創刊して以来、みなさまの変わらぬご理解とご支援をいただき、順調に号を重ねることができました。関係者のみなさまに、あらためてお礼を申し上げます。

さて、今号では、『十帖源氏』の多言語翻訳に取り組んでいる中で、原本に関する論考やロシア語訳の問題点などを掲載しました。『とりかへばや物語』の考察も興味深いものです。国際的、学際的な視点でお読みいただくと幸いです。

付録には、『源氏物語』のイタリア語、ロシア語、中国語、ヒンディー語、ウルドゥー語による「桐壺」の訳し戻しデータを収載しました。ことばによる翻訳を通して文化の変容を考える際には、貴重な資料とならずです。幅広く活用していただくと幸いです。

なお、科研費による研究成果としての『海外平安文学研究ジャーナル』は、ここでひとまず終刊となります。しかし、オンラインジャーナルとしては、これまで通りのサイトから引き続き発行いたします。第7号からの発行母体は変わっても、その基本的な方針はそのままだに、さらにバージョンアップして続刊していくつもりです。

本課題では、国際的な視野で日本文学および日本文化を見つめることを意識して、さまざまな問題に取り組んでいきます。今後とも、多角的な視点で平安文学を論じた、みなさまからの意欲的な投稿を歓迎します。

2017年3月1日

日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (A)
「海外における源氏物語を中心とした平安文学及び各国語翻訳に関する
総合的調査研究」(課題番号：25244012)

研究代表者

大学共同利用機関法人人間文化研究機構

国立大学法人総合研究大学院大学

国文学研究資料館 伊藤鉄也

■『海外平安文学研究ジャーナル』原稿執筆要項■

本ジャーナルの原稿を募ります。平安文学に関する論稿等をお寄せください。

- 1 論文分量 400字原稿用紙換算で30枚以上(12,000字以上)
小研究(20枚以下)、研究余滴(10枚以下)、翻訳実践(自由)
- 2 原稿表記 原則として日本語表記・横書き
- 3 原稿締切 随時(応募希望者は、〈氏名・所属・仮題・簡単な原稿内容・パソコンのメールアドレス〉等を明記して、あらかじめ執筆意向を【itokaken@gmail.com】まで連絡のこと)
- 4 電子公開 毎年春・秋(予定)
- 5 体裁 A5版の版面を想定したオンライン画面
- 6 推奨版面 ・活字11ポイント、27行×34字詰、余白上下左右20ミリ
・フォントは、MS明朝、Times New Roman
・節ごとに小見出しを付す。
・注は版面ごとにそれぞれ下部にアンダーラインを引いて付す。
注番号は本文の当該箇所に丸括弧()付きの数字で示す。
(参考文献の書式例については、「海外源氏情報」内「海外平安文学研究ジャーナル」(<http://genjiito.org/journals/>)参照のこと)
- 7 原稿入稿 ワード文書またはテキストファイルをメールに添付して送付。
問い合わせ・送付先 【itokaken@gmail.com】
- 8 採否/校正 採否はメールで連絡。執筆者の校正は初校のみ。ただし、公開から1年以内に1度だけ改訂版に差し替え可能。
- 9 図版・写真など 掲載許可が必要な場合、原則として資料手配や使用料は執筆者の負担。図版・写真は、原稿枚数の中に含む。

目次

あいさつ 伊藤 鉄也 3

原稿執筆要項 5

❁ 研究論文

『十帖源氏』の本文と各種版本—和歌の異文と解釈の問題—
清水 婦久子 11

母語話者・非母語話者によるロシア語訳『十帖源氏』桐壺巻比較考
—母語話者による翻訳に見る日本文化の受容— 土田 久美子 29

「交じらふ」女主人公
—ジェンダーコードの視点から読む『とりかへばや物語』—
庄 婕淳 39

❁ 研究の最前線

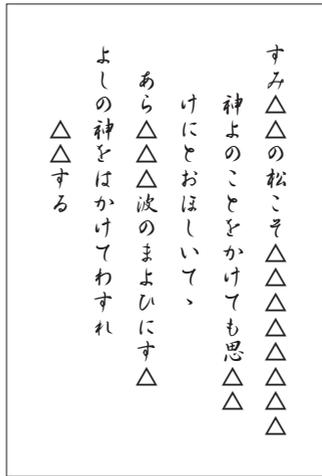
「訳し戻し」という「翻訳」 藤井 由紀子 61

英訳『今昔物語集』兵と戦いの世界 浅川 槿子 65

❁ 科研活動報告

科研活動報告 vol.2 加々良 恵子 93

❁ 付録	103
『源氏物語』「桐壺」イタリア語	105
ロシア語	119
中国語	129
ヒンディー語	137
ウルドゥー語	146
「若紫」イタリア語	156
ロシア語	202
ヒンディー語	219
ウルドゥー語	237
『十帖源氏』「桐壺」中国語	252
執筆者一覧	259
編集後記	260
研究組織	261



(色紙詞書)

*表紙・前扉・扉 人間文化研究機構・国文学研究資料館所蔵
『源氏物語屏風』「滯標」巻の色紙
(金箔散下絵入の詞書、金泥彩色画／番号：ラ1ー18)

研究論文



『十帖源氏』の本文と各種版本 —和歌の異文と解釈の問題—

清水 婦久子
(しみず ぶくこ)

❁ 1. 『十帖源氏』の出版

『十帖源氏』の現代語訳を基に海外の方々に翻訳をお願いしているが、翻訳以前に、現代の日本語に訳す段階で留意すべきこともある。『十帖源氏』がどのような本なのか、その歴史的背景と本文の特徴を明らかにしておく必要があるだろう。本稿では、既に論じたこと¹と合わせて、同時代の版本や本文・注釈などとの関わり、物語の解釈に関わる問題について述べる。

『十帖源氏』の成立は、編者である野々口立圃自署の跋文に「老て二たび兒に成たりといふにや」とあることから、その還暦に当たる承応三年(1654)に完成したとする説²が妥当であろう。吉田幸一氏は、『十帖源氏』の出版について、次の四種の版を紹介し、諸版の書誌を詳細に検討して明らかにされた³。

- A 「万治四年卯月吉辰／荒木利兵衛板行」跋文あり（立圃ナシ）
- B 「万治四年卯月吉辰」、跋文と末尾に「立圃」の名
- C 刊年なし、跋文と「立圃」の署名
- D 刊記も跋文もなし

1 拙著『源氏物語版本の研究』（和泉書院,2003）、拙稿「近世源氏物語テキストの編集と注釈」（竹林舎『新時代への源氏学7』p166-198,2015）

2 『日本古典文学大辞典』（岩波書店,1983）p277「十帖源氏」の項（渡辺守邦氏執筆）

3 吉田幸一『絵入本源氏物語考 上』（青裳堂書店日本書誌学大系 53,1987）p194-244「十帖源氏」考、および吉田幸一編『十帖源氏 上』（古典文庫,1989）p.397-414「所収本書誌」

一般に版本は刊記の年代によって「～年版」とされることが多いが、近世初期の出版事情は複雑であり、この場合、無刊記のC Dが初版であり、万治四年（1661）版は後の版である。吉田氏は、Dの巻末に立圃自筆奥書（跋文）・署名花押が記されている佐賀大学図書館蔵小城鍋島文庫本を示し、Cはその奥書を巻末に加えて出版したものとし、Aは万治四年に荒木利兵衛が公刊した版で、Bはその後刷り本と推定された⁴。立圃は、承応三年からほどなく私家版として出版したのだろう。17世紀前半、書肆（本屋）がまだ商業化されていない京都で作られた版本に多い形である。ただし、無跋無刊記の本がすべて初版とは限らず、同版によって長く増刷された場合、もとあった刊記や跋文を削った後刷り本もあるので注意したい。

万治四年に刊行され市販されたものが、Cの荒木利兵衛版であるはずだが、それよりも現存部数が多いと思われるのが、書肆名「荒木利兵衛」を削って「立圃」の名を入れ木（埋木）で加えたBの版である。吉田氏は、Bの文字に欠損が目立つことを根拠として後刷りとされたが、筆者が実見し得たBの三本においては、文字にも挿絵にも欠損やつぶれはなく、薄墨の場合でも繊細鮮明で線が鋭い。つまり、Bの版にも初刷りと後刷りが含まれていることがうかがえる。また、沼尻利通氏は、佐賀大学図書館蔵小城鍋島文庫蔵のAとDを比較し、万治版のA Bは初版Cの覆刻であると実証された⁵。その報告を受けて、BとD⁶を比較すると、本文はほとんど一致するものの、挿絵に異なる部分の多いことを確認した。例えば、若紫巻のかいま見の挿絵でDにある雀がBの架蔵本にない

4 A 東京都立中央図書館蔵東京誌料本・国文学研究資料館蔵本、B 東洋大学蔵岩崎文庫本・京都大学図書館蔵本・佐賀大学図書館蔵小城鍋島文庫本 a・東海大学付属図書館蔵桃園文庫本 a、C 広島大学国文学研究室蔵本・国立国会図書館蔵本、D 東海大学付属図書館蔵桃園文庫本 b・佐賀大学図書館蔵小城鍋島文庫本 b（立圃自跋自署）・東京大学青州文庫本・吉田氏御架蔵本（古典文庫『十帖源氏』の底本）を紹介

5 沼尻利通「野々口立圃『十帖源氏』の初版と覆刻」（『雅俗』13,2014）

6 B 帝塚山大学蔵本・大阪女子大学蔵本 a（現在は大阪府立大学学術情報センター蔵）・架蔵本、D 大阪女子大学蔵本 b（同上）を確認

と述べた⁷のは、版木を削ったものではなく同板ではなかったのである。特に雲霞や波の線、顔の表情（特に眉）などの細部が異なる。挿絵の描写に支障はなく本文の筆跡はよく再現されているので、被（かぶ）せ彫りとなれば技術の高い仕事と言える。C Dの後刷り本が伝わらないなら、海賊版ではなく版木の焼失などによって改刻した可能性もある。『おさな源氏』には『十帖源氏』の挿絵が流用され、裏返した図もあることから、挿絵のみが被せ彫りで作られたと推測される。『十帖源氏』A Bの挿絵に初版C Dと異なるものが目立つのは、一頁ごとに分けて紙を薄く剥離し貼り付けて彫る工程で、挿絵と文字とが別の（技術の異なる）彫り師であった結果と思われる。

❁ 2. 『十帖源氏』の周辺

次に、『十帖源氏』が依拠していた本について明らかにする。近世初期に出回っていた源氏物語全文を有する整版本は次の7種類である。それぞれ成立事情が異なるので、初版の刊行順⁸に示した。

- 1 寛永頃（1640）無跋無刊記整版本『源氏物語』
- 2 慶安三年（1650）山本春正跋「絵入源氏物語」
- 3 承応元年（1652）松永貞徳跋『万水一露』
- 4 万治三年（1660）刊「絵入源氏物語」
- 5 寛文頃（1670）無刊記小本「絵入源氏物語」
- 6 寛文十三年（1673）刊『首書源氏物語』
- 7 延宝元年（1673）北村季吟跋『湖月抄』

これ以前の版本としては、慶長中期（1610頃）十行古活字、慶長中期（1610頃）伝嵯峨本、元和九年（1623）版、寛永中期（1630頃）版

7 拙稿「『十帖源氏』『おさな源氏』と無刊記本『源氏物語』一若紫巻の本文一」（『青須我波良』58,p27-53,2003）

8 注1に同じ

の各種古活字版があるが、立圃が常備することはおそらく困難で、その必要もなかった。立圃が依拠した本は、1の無刊記本と、その本文を加えた3の版本『万水一露』と推測される⁹。近世版本の本文は、同じ青表紙本系統ではあるものの、現代活字本の底本である大島本や明融本などとは少し異なるが、その中でも、1・3と、2・4～7とでは、さらに異なる¹⁰。

『十帖源氏』が完成した承応三年は、慶安三年跋「絵入源氏」の再版である「承応三年八尾勘兵衛」版が出された年でもある。吉田氏は、「絵入源氏」の初版を承応版としたが、その根拠とされた本が1の無刊記本との取り合わせ本であったことから、別の版をも含めた諸本の版面をあらためて詳細に調査した結果、刊記のない本が初版であることを実証した¹¹。

『十帖源氏』の出版と同様、「絵入源氏」も、跋文の慶安三年からまもなく初版が出され、承応三年に八尾勘兵衛が求版して市販されたのである。立圃は、少し前に出た「絵入源氏」の挿絵226図の過半数を目指して『十帖源氏』に131図の挿絵を入れたのであろう。狩野探幽に弟子入りして絵を学んだ成果として、挿絵には狩野派の影響が濃厚な図様が見られる一方、立圃特有の活き活きとした俳画風の図様と、「絵入源氏」の影響を受けた図様などが混在している¹²。

本文については、『十帖源氏』に「絵入源氏」の影響はあまり見られない。「絵入源氏」には濁点・読点・振り仮名・傍注などが施されているが、1の無刊記本『源氏物語』は本文のみで、古来の写本や古活字本と同様、読点も濁点もない簡素な形式である。版本の中でも三条西家系

9 拙稿「『十帖源氏』『おさな源氏』の本文—歌書としての版本—」（岩波書店「文学」4-4,p104-114,2003）および注7の拙稿

10 注1の拙著p207-340「源氏物語版本の本文」、拙著『絵入源氏』（おうふう）桐壺巻（1993）・夕顔巻（1995）・若紫巻（2003）において「絵入源氏」本文と青表紙本諸本・版本諸本との校異を掲載

11 注1の拙著p39-72「慶安三年本の成立と出版」（初出「青須我波良」38,1989）、注10の『絵入源氏 若紫巻』p.89-140解説

12 注1の拙著p407-500「絵入り版本の挿絵」

統の正統な本文に近いことから、源氏物語の最初の整版本と推測した。3の版本『万水一露』は、能登永閑の注釈書に物語の全文を加え、松永貞徳の跋文を添えて出版した書である。その物語本文が1の無刊記本に一致することから、1は貞徳が私塾の講義テキストとして作成した本と推定した¹³。そして『十帖源氏』の本文は、1から抄出されたと思われる。若い頃に貞徳のもとで俳諧を学んだ立圃であるから、1と3の版本を所持し参照したとしても不思議ではない。

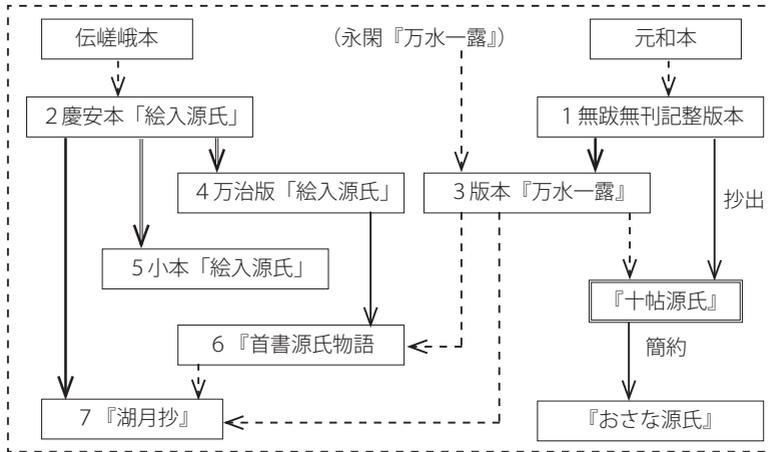
「絵入源氏」のうち、2の慶安本は、歌人で時絵師でもあった山本春正が貞徳の指導を受けて編集した本であるが、4と5は2を基にそれぞれ別人が版型を変えて作った異版（海賊版）である¹⁴。「絵入源氏」は単なる絵本ではなく、本文に解釈を示す読点・濁点・振り仮名・傍注や引歌の合点まで施した最初の版本であり、読みやすく画期的な本文表記が、以後の源氏物語版本を一変させた。『湖月抄』の本文は、2の慶安本「絵入源氏」を底本とし、『首書源氏』も、3の万治本「絵入源氏」を基に版下を作成している。

以上の本文を比較調査した結果を基に推定される関係を図示する。親子関係（底本）には実線（模写は二重線）、校訂に利用された本は点線で区別した。このように、近世版本にもそれぞれ違いがあり、結果的に後世に流布した本文と『十帖源氏』との異文も生じている。

13 注1の拙著 p261-288「版本『万水一露』の本文と無刊記本『源氏物語』」（初出「青須我波良」51,p27-53,1997）

14 吉田氏はこの二種も春正編と推測したが、内容を詳細に調査し、慶安本を模した異版（海賊版）と実証。注1の拙著 p73-103「万治版横本と無刊記小本の成立」（初出「青須我波良」39,1990）。拙稿「晶子の愛読した版本『絵入源氏物語』」（與謝野晶子倶楽部「與謝野晶子の世界」14,2017）では與謝野晶子が5の小本「絵入源氏」を所持し愛読していたことを詳述

《版本の本文継承図(推定)》



❁ 3. 『十帖源氏』の和歌本文

『十帖源氏』を現代語に訳す際に注意しておくべきは本文の違いである。『十帖源氏』の本文は、現行の活字本になった流布本とも、近世近代の流布本とも異なる部分がある。例えば、若紫巻の北山の場合で、現代の流布本が「しりへの山」とあるのを、『十帖源氏』で「うしろの山」としていることについて、立圃がわかりやすい言葉にしたと考えると間違いで、三条西家本および版本諸本が「うしろの山」とあって、『十帖源氏』はそれに従ったまでである。また尼君の年齢についても、諸本は「四十よばかり」とあるが、無刊記本を含む版本の一部が「四十あまり」であり、「絵入源氏」・『首書源氏』は「四十ばかり」、『湖月抄』は「四十あまりばかり」とあり、『十帖源氏』は「四十あまり」を採っている¹⁵。こうした確認をせずに立圃が本文を改変したなどといった説明はできない。つまり、要約によって原文から改変されただけでなく、依拠した原文が異なるため、時に解釈が変わる場合が見られるのである。

15 注7の拙稿で具体的に校異を示した

以下に取り上げるのは、古典作品においては比較的生じにくい和歌本文の異文である。今回のプロジェクトでは、『十帖源氏』の和歌を訳さないが、『十帖源氏』は和歌をすべて掲載し、和歌にまつわる話題に焦点を当てて要約してあることから、和歌本文の場合はわずかの異文であっても、この作品の鑑賞に少なからず影響を与える。全文を刻した「絵入源氏」の場合、和歌は本文の3%であるのに対して、和歌を省かず地の文のみを要約した『十帖源氏』では全体の22%が和歌となる。既に翻訳を進めている桐壺巻においては、地の文の省略も少なく、和歌本文が問題になることはなかったと思われるが、①～⑥の異文は物語の解釈にも影響するので紹介したい。『十帖源氏』が多数の本と異なる和歌本文である。

①ことのねも月きくもえならぬやとなから

つれなき人をひきやとめける（一、帚木巻）

傍線部は、現代の流布本である青表紙本諸本では「つき」、河内本系統では「きく」である。版本の間でも分かれていて、伝嵯峨本と『湖月抄』は「月」、菊イ「絵入源氏」は「月」、『首書源氏』も「月」とあるのに対して、元和本・無刊記本・『万水一露』では「きく」とある。『万水一露』の注釈には「河 定家卿本菊イ親行本月也」とあるから、立圃は、この点を承知して「きく」と「月」を並記したのであろう。立圃は無刊記本の本文を要約するだけでなく、『万水一露』などの注も参照していたことがわかる。これを読者はどう理解するか、和歌を翻訳する場合はどうするか。古くから伝わる異文であり、物語場面の解釈に深く関わるので、その検討は後述する。

②さきま花しるはいつれとわかねとも

なをとこなつにしくものそなき（一、帚木巻）

この歌も帚木巻における異文である。「花」の本文は、無刊記本・『万水一露』と『十帖源氏』に共通している。宗祇の『雨夜談抄』には「花はいつれそ」の見出し本文で「さきま^花しる花とは秋の庭のさまなり」とあり、『万水一露』も同じ注釈を採る。それに対して、青表紙本諸本と伝嵯峨本は「いろ」で、「絵入源氏」は「色」と異文注記を施す。ところが『首書源氏』では、本文は「いろ」であるにも関わらず、頭注には「細 咲ま^花しる花とは秋の庭のさま也」とし、現代の諸注でも「いろ」の本文に同様の説明をしている。

この歌は、常夏の女（後の夕顔）が、撫子の花を添えて送った歌、

山がつの垣ほ荒るとも折々にあはれはかけよ撫子の露

に対する頭中将（娘の父親）の返歌である。頭中将は、愛娘を意味する「撫子」を、床をともにする愛妻の意味を持つ「常夏」にすり替えて返したため、女は頭中将の前から姿を消したのである。『十帖源氏』も要約を最小限にとどめたため、物語の状況は理解しやすくなっている。現代の諸注が〈いろいろ咲いている花はどれがよいか見分けられないが常夏の花には及ばない〉などと訳すのは、両方の本文を合わせた解釈で、「色は」の厳密な解釈とは言いがたい。〈秋の様々な花が咲いている中で常夏（撫子の別称）が一番だ〉とするなら、『十帖源氏』などの「花は」の方がわかりやすい。逆に、現代の流布本の「色は」であれば、〈濃淡色々の撫子が咲いている中で常夏（ナデシコ科の別品種）が一番だ〉と解釈すべきではないだろうか。「絵入源氏」の挿絵では、白黒の（赤色系の濃淡を表す）撫子だけを描き、ナデシコ科の別品種（大和撫子と唐撫子など）を撫子・常夏と呼び分けていた可能性を示唆する。現代の注釈では、常夏を撫子の別名とするが、文政十一年（1828）の版本『本草図譜』には赤系濃淡の撫子が多数掲載されているから、春正や立圃は、撫子と常夏をナデシコ科の別の花と認識していた可能性がある。

③くみそめてくやしときゝし山の井の

あさきなからやかかけをみるへき（二、若紫巻）

この場合は、現代の流布本とは同文だが、近世の版本では無刊記本・『万水一露』だけと一致し、肖柏本・三条西家青表紙証本と他の版本では「みすへき」である。「す」「る」は変体仮名の形が似ているので単純な誤写によると思われるが、それでも〈見る〉か〈見せる〉のかで意味が変わってしまう。『万水一露』には『細流抄』の「影をみすへきは見えかたしとも或云見るへきは源を待ち見るへき也」と永閑の注「浅なから影を見せんの心也」があるので、立圃は異文の存在に気づいていたかもしれない。

この歌は、紫の君の引き取りを望む源氏の歌、

浅香山浅くも人を思はぬになど山の井のかけはなるらん
に、祖母の尼君が返した歌である。源氏の歌は〈私の心は浅くないのにどうしてあなたは離れていくのですか〉といった意味でよいと思う。それに対して、尼君の歌の「あさきながら」は〈あなたの御心が浅いままで〉としても、肝心の第五句の意味がわかりにくい。「影を見るべき」を「源を待ち見るべき」と解すなら〈あなた様をお迎えできましようか〉となる。一方、「見すべき」なら〈紫の君をお目にかけることができましようか〉となるが、現代の注では「見るべき」の本文でこの説明をしたものが多い。尼君が源氏の浮ついた心を懸念していることは確かだが、誰の「影」を「見る」「見す」のか、また源氏の歌の第五句「かけはなる」に「影」が含まれるとするかどうかの問題になるだろう。

④ひとりゐてなかめしよりはあまのすむ

かたをかきてそみるへかりける（三、絵合巻）

この歌は、肖柏本・三条西家青表紙証本および版本諸本と『十帖源氏』が一致する。それに対して現代の流布本では、傍線部分が「なけきし」「かくてそ」とあり、当然のことながら歌の意味も変わる。『万水一露』の永閑の注には「我ひとりなかめんよりは絵を書てなくさむへかりし物をとの心也」とあり、〈一人でながめているより絵を描いてわが心を慰めればよかった〉という意味になる。一方、「ひとりゐてなげきしよりは

あまのすむかたをかくてぞみるべかりける」の本文では、〈一人で嘆いているより海辺の絵をこうして見ていればよかった〉と解することができる。紫の上がわが身を慰めるにしても絵を描いて紛らわすのと、絵を鑑賞するだけでは印象が異なる。

⑤あめにますとよわかひめのみや人も
わかこゝろさすしめをわするな（四、乙女巻）

これは、諸本「とよをか」に対して、無刊記本のみが「とよわか」であり、立圃はこの独自本文を採用した。版本『万水一露』と「絵入源氏」では「とよわか」とあり、この異文注記は、『孟津抄』の「青表紙にはとよわか姫とあり用之」による¹⁶。

⑥見る人の心にかよふはななれや
いろにはいてすしたにほへる（九、早蕨巻）

諸本「をる」「おる」に対して無刊記本のみ「みる」とあるのを採ったもので、『湖月抄』は「見るイをる」とする。「お」「み」の形が似ているため次の歌の第一句「みる人に」を目移りした単純な誤写だろうが、こうした独自本文に一致することも、無刊記本が『十帖源氏』の底本であるとする一つの根拠となる。結果として、梅を愛でるだけの「見る」と自分のものにする「折る」とでは贈答歌の意味が変わる。物語では、歌の前に「梅の香を愛でおはする、しづえ下枝を押し折りて参りたまへる」とあり、それを受けて匂宮は「折る人に」の歌を詠んだ。ところが、『十帖源氏』では「梅のかをめておはする」の直後に匂宮の「みる人に」の歌がある。薫が「梅の枝を折る」文もなく匂宮も「折る」とは言わないのに、薫の返歌、

見る人にかことよせける花のえを心してこそおるべかりけれ

16 注1の拙稿「近世源氏物語テキストの編集と注釈」p178-179

において唐突に「折る」と言うのでは不自然である。

以上のように、『十帖源氏』の本文が多数の本と異なることも多いので、現代の活字本の口語訳を参照する場合には本文との齟齬に注意したい。また、古語や古文への理解とは別に、撫子・常夏の例のように現代人が見落としがちな自然の景物への理解も必要となる。地の文を省略して歌を列挙する『十帖源氏』なら、なおさら歌の解釈に注意が必要となるだろう。

❁ 4. 和歌の異文と物語の情景

以上の異文のうち、特に解釈に大きく関わる①の歌について検討する。この歌は、左馬頭の体験談、木枯らしの女の話の中で若い殿上人が詠んだ歌である。長くなるが、その部分が無跋無刊記整版本で引用する。傍線部は『十帖源氏』と一致する箇所である。

あれたるくつれより池の水かけみえて 月にやとるすみかをす
きんもさすかにており侍ぬかしもとより さる心をはせるにや
ありけん此おとこいたくす、ろきてかどちかきらうのすのこた
つ物にしりかけてとはかり 月をみる菊いとおもしろくうつろひ
わたりて風にきほへる紅葉のみたれ なと哀とけにみえたりふと
ころなりける笛とりいて、吹ならしかげもよし なとつ、しりう
たふ程によくなるわこんをしらへ とのへたりけるうるはしく
かきあはせたりし程けしうは あらすかしりちのしらへ は女の物
やはらかに かきならしてすの うちより聞えたるもいまめきたる
物のこゑなれば きよくすめる月にをりつき なからすおとこいた
くめて、すのもとにあゆみきて 庭の紅葉こそけにふみわけたる
あともなけれ なとねたます菊をおりて

ことの音もきくもえ ならぬ宿 なからつれなき人 をひき やと
めける わろかめり なといひて いまひとこゑ 聞はやすへ き人のあ

るときに手なのこひ給そなといたくあされか、れは女声いたう
つくるひて

こからしにふきあはすめる笛のねをひきと、むへきことの
葉そなきとなまめきかはすにく、なるをもしらてまたさうの
ことをはんしきてうにしらへていまめかしくかいひきたるつま
をとかとなきにはあらねとまはゆき心ちなんし侍し

(無跋無刊記整版本『源氏物語』帚木卷、二十二ウ～二十四ウ)

庭の紅葉や菊、琴と笛の合奏といった、絵画の題材に適した美しい場面であることから、源氏絵・屏風絵の素材としてたびたび描かれた(図版参照)。ただし、和歌とその表現を引き出す波線部に注目すると、ただ絵画的というだけではないことがわかる。

この贈答歌には、縁語と掛詞が多用されている。「琴」の縁語で「弾き(とどむ)」、女の歌の「言の葉」も「木枯らし」の縁語で、「琴の音」「笛の音」から「ことの根」ならぬ「ことの葉」を引き出した。男が笛を吹き鳴らし「かげもよし」と唄う催馬楽「飛鳥井」¹⁷の言の葉「宿りはすべし」(ここに泊まりたい)に対して、女は、紅葉を乱れさせる木枯らしに和する笛の音を止めるほどの琴の音も男を引きとめる(泊める)言葉もありません、と返したのである。

問題は男の詠んだ歌の本文である。「月」と「菊」のいずれがよいか、本来はどちらだったのかが、古注から現在に至るまで長らく論じられてきた。近年では、『河海抄』の指摘「定家卿本菊親行本月也」とは逆に、河内本で「菊」、青表紙本諸本で「月」とあることから、概ね「月」として説明¹⁸される。異文を挙げる場合も、「月もえならぬ」の本文では、池に月が宿る住まいを愛でたと解するのに対して、「菊もえならぬ」の場合は菊の花の美しさを愛でたという、視覚的風景の違いとして説明す

17 「飛鳥井に宿りはすべしやおけ 蔭もよしみもひも寒しみま草もよし」(催馬楽「飛鳥井」)

18 鈴木美弥「『琴の音も月もえならぬ宿ながら』—『月』と『菊』の本文異同」(至文堂『源氏物語の鑑賞と基礎知識 帚木』p104-105,1999)

る。「月」がよいとする立場は、菊より月の描写の方が丁寧であり、「律の調べ」による和琴の音色が、「清く澄める月にをりつきながら」とあり、男が愛でたのが琴の音と月との調和であったことを根拠とする。

それに対して「菊」がよいとする立場は、「菊を折りて」詠んだ歌であり、「琴の音もきく」に「菊」と「聞く」が縁語として含まれることを挙げる。琴の音と月とでは聴覚と視覚の調和に過ぎないが、「琴の音もきくも」の本文なら、菊を愛でるだけでなく、琴の音色で「聞く」人を引き止める意味が加わる。男が愛でたのは「清く澄める月」という視覚的風景だけではなく、音色が響き渡る秋の澄み切った空気に合わせて「律の調べ」を「ものやはらかにかき鳴らし」た女の琴の音色に対してであった。

この場面の眼目は、女の琴の音と男の笛の音である。その音色を「聞く」からこそ男は「菊」を折ったのである。つまり、菊と月の視覚的描写だけを比較すれば月の方が詳しいが、より詳しく具体的に描写されているのは「琴の音」である。塀の外にいた馬頭は、二人を「見て」いただけでなく、女の琴の音色と調弦を確実に「聞き」分けて評価していたのである。

『十帖源氏』の本文を引用する。

あれたるくつれより池の水月たにやとるすみかをとておりて入りぬも
とより心かはせるにやらうのすのこたつ物にしりかけて笛とり出てふ
きならず内よりわこんをかきあはせたりおとこ菊をおりて

ことのねも月ぎくもえならぬやとなから

つれなき人をひきやとめける

いま一こ糸きくはやすへき人のある時に手なのこひ給ふそといたくあ
されかゝれは女声つくるひて

こからしにふきあはすめるふえのねを

ひきとゝむへきことのほそなき（『十帖源氏 一』十八才）

「絵入源氏」が「月」に漢字の異文注記「菊イ」を記したのと異なり、『十帖源氏』では、かな表記の「きく」に「月」を傍記している。これは「菊

／聞く」の掛詞を意識したからだろう¹⁹。平安時代の和歌にも、立圃の時代の俳諧にも「菊／聞く」の掛詞の例が多数ある。立圃は、無刊記本の本文を無批判に受け継ぐだけでなく、『万水一露』の注釈「定家御本菊親行本月也」などをも意識して本文に反映させたのだろう。しかも、要約した地の文にも、風景の重要なところ（波線部）を残している。

この歌で注目すべきは、菊と月の異文だけではない。実は、異文のあとの「えならぬ」には、「えも言われぬ」の意味だけでなく、水辺なら「江」、草木なら「枝」が縁語・掛詞として含まれている²⁰。

「きくもえならぬ」の場合、歌の直前の「菊を折りて」を受けて「枝」という縁語を含む。と同時に「聞く」との掛詞になる。歌の直後に「聞きはやすべき人のある時」とあるように、琴や笛は聞く人があって初めて意味を持つ。重要なことは、帚木巻の場面が、女の琴の演奏を詳細に描写した点である。その演奏を、馬頭はいちいち評価し、体験談の前には女について「うちよみ、はしり書き、かい弾く爪音、手つき口つき、みなたどたどしからず」と語り出した。この部分、『十帖源氏』も「歌よみはしりかきかいひくつまをと手つき口つきたと／＼しからず」と引用している。無刊記本は諸本と同じ「うちよみ」であるが、『万水一露』が「うちよみはしりかきとは歌をよみ手をかく事也」とすることから、『十帖源氏』では「歌よみ」とわかりやすくした。「うち読み」では意味が変わるので、これは親切な表記と言える。

一方、「月もえならぬ」の本文であれば、池の「江」を含んでいることになる。「池の水かげ見えて月だに宿るすみか」「清くすめる」に呼応し、琴の音も月までもが池ならぬ宿に住む（澄む）という意味になり、男の唄う「宿りはすべし」や「庭の紅葉こそ踏み分けたるあともなけれ」（訪問客はないのだね）を受けた歌となる。この歌が「月」の本文で伝わっ

19 『十帖源氏』は葵巻の歌を「人の世をあはれときくもつゆけきにつるゝ袖をおもひこそやれ」と引用し、「菊／聞く」の掛詞とする。

20 拙稿「源氏物語の和歌—縁語・掛詞の重要性—」（岩波書店「文学」7-5,p.71-84,2006）で、「菊／聞く」の掛詞と「え（ならぬ／にし／にこそ）」に「枝」「江」の掛詞・掛詞が含まれる用例を提示

てきたのは、月の美しさを描いただけでなく、池に影を映して宿る（澄める／住める）月を男に見立てたと理解されてきたからであろう。

男の歌には「琴の音／根」「聞く／菊」「得／枝ならぬ」「引き／弾き」とあり、女の歌には「木枯らし」に「吹きあはす」「笛の音／根」「引き／弾き」「琴／言の葉」とあって、男が菊の枝を折り、紅葉が風に舞う風景の中で琴と笛を合奏する二人にふさわしい贈答歌になっている。双方が楽（琴と笛）の音を主題とし、植物（菊と紅葉）の縁語（菊・枝・根・葉・木枯らし）で仕立てた高度な贈答歌と言える。ここに「月」の異文を加えてみると、「池の水月だに宿るすみか」で「菊を折り」、「琴の音」を「聞くも／菊の枝も」「月の宿る池も」すばらしい宿だが、聞く人（訪問者）を琴の音色で引き留めることができるでしょうか、となる。「月」と「菊」を視覚的景物として比べただけで、古来伝えられてきた「菊」の本文を排除すべきでないことは明白である。

「きく」と「月」とを並記した『十帖源氏』は、源氏物語の歌と場面の豊かさに気づかせてくれる。掛詞や縁語を、外国語はもちろん日本語の口語に訳すことも困難なことは承知の上で、和歌の異文が物語場面の解釈にも関わる例として、あえて言葉を費やした。

❁ 5. 『十帖源氏』の注釈意識と特色

異文の他にも、立圃の注釈意識のうかがえる所がある。帚木巻の地の文には、「初段」「二段」と段数が注記されている。この段数は無刊記本にはなく、『万水一露』に『花鳥余情』の注「是より下は源氏と中将との問答に四たん有へし第一だん中将の詞也」があり、『十帖源氏』も「頭中将詞初段」などと記すが、その他の段は一致しない。『十帖源氏』ではそのあと「二段」「頭中三段」「源詞四段」「馬詞」「源詞二段」「馬詞三段」「源詞」「四段」「馬詞五段」「馬」「馬詞八段」「馬物語九段」と記すが、それがことごとく「絵入源氏」の傍注と一致している。本文自体に「絵入源氏」の影響は少ないが、この点は「絵入源氏」の注記を踏襲したのである。「絵入源氏」の初版が、『十帖源氏』成立と同じ承応三年

ならあり得ないが、「絵入源氏」は4年前の慶安三年に出版されていた。立圃が本文の草稿を作る際には無刊記本を基にしたとしても、版下作成の段階では「絵入源氏」が入手できたのだから、挿絵や傍注を加えることもしただろう。

この注記は、春正の「絵入源氏」を通じて貞門の学統を継承したものと思われる。貞徳は、徒然草を初めて段に分け、頭注を付け、挿絵を入れた『なぐさみ草』を慶安五年（1652）に出版した。区切りのなかった古典作品を章段に分けて挿絵を添えて出版したのは、古典をわかりやすくして伝えようとする貞徳の学問の特色と工夫によるものであり、春正の「絵入源氏」や季吟の『徒然草文段抄』・『湖月抄』はこれを踏襲している。貞徳自身は、源氏物語の書は出版せず、能登永閑の注釈に本文を添えた『万水一露』を出しただけであったが、春正、立圃、季吟といった次世代の門人たちが相次いで源氏物語の版本を編集し出版したことは、貞徳の学統をそれぞれの立場において受け継ぎ、世に伝えたものと言える。

浅川槇子氏²¹の調査報告によると、紫式部の母と祖父の名前についての『十帖源氏』序文の記事は、既に出版されていた『紹巴抄』や『源義弁引抄』に基づいていたことがうかがえる。それに対して、問題の記事がある「絵入源氏」付録の『源氏目案』序文は、貞徳の師である九条種通の『孟津抄』に基づく²²ので、同じ貞徳の学統でも春正は歌人として、立圃は俳諧師としての学統を継承したということだろうか。この点は今後の課題であろう²³。

『十帖源氏』帚木巻に記された段数が、本文を大幅に省略した欠点を

21 浅川槇子『『十帖源氏』の多言語翻訳と系図について―「母の堅子」と「祖父の惟正」はどこから来てどこへ行ったのか―』（『海外平安文学研究ジャーナル』4.0,p76-98,2016）

22 注1の拙著 P.135-148 『『源氏目案』序文と『孟津抄』』

23 中尾友香梨ほか（小城鍋島文庫研究会）「小城鍋島文庫蔵『十帖源氏』翻刻稿」（一）（二）（『佐賀大学文化教育学部研究論文集』20-1,2015・20-2,2016）によると、立圃が鍋島直能に献上した『十帖源氏』初版の書き入れに『紹巴抄』の影響がうかがえる。

補っているように、挿絵もまた、本文の短さや説明不足を補うことが多い²⁴。日本の古典文学は常に絵とともに伝えられてきたが、特定の場面の物語本文を抄出した『源氏物語絵巻』や『源氏物語画帖』と同様、『十帖源氏』もまた、挿絵と簡潔な本文とで物語世界を伝えてくれる作品である。先に見た帚木巻の木枯らしの女の場面では、土佐派の絵師が描く彩色画では、月・菊・紅葉・池などを色彩豊かに描き、笛を吹く男に焦点を当てる。それに対して「絵入源氏」と『十帖源氏』の挿絵は、御簾の内に琴を弾く女の姿を描いている（図版参照）。この挿絵を見た読者が、笛と琴の合奏の場面だと気づけば、自ずと風景の意味や歌の言葉にも注意を払うだろう。

原文だけでは判断し難い歌の詠み手についても、『十帖源氏』では誰の歌かを明記している。明石巻に、次の表記がある。

入道 よる波にたちかさねたる旅ころも

しほとけしとや人のいとはん（『十帖源氏 三』三十才）

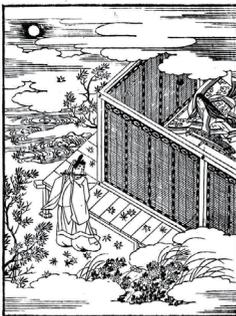
「絵入源氏」・『万水一露』・『首書源氏』も詠み手を「入道」とするが、『湖月抄』では傍注に「明石上入道両説」として、頭注には「抄 明石上のうたなり」と「孟 入道の歌には似合ひたる也」を挙げている。そして現代の注釈書の多くは、歌の詠み手を明石君（古注では「明石上」）としている。「絵入源氏」・『万水一露』などは、歌の表現「よる波」「しほとけし」から入道が詠んだ歌と理解し、『十帖源氏』はそれを踏襲した。これに対して、現代の通説では、「今日奉るべき狩の御装束に」歌が添えてあったことから、源氏の出立の装束を「裁ち重ね」て仕立てた明石君が狩衣に歌を挟んだと推測した。

源氏物語版本の編者はいずれも和歌や俳諧に携わる人であった。彼等は、現代人が想像するよりはるかに歌および歌語を重視していた。中世から近世にかけて作られた梗概書の多くは、源氏物語を歌物語や歌集の

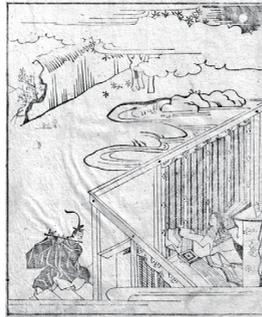
24 拙稿「江戸時代の『源氏物語』版本の挿絵」（和泉書院『首書源氏物語』桐壺～玉鬘巻末付録,1980～1994）図版解説

ような形にしたものであり、概要・あらすじを主とする現代の梗概書とは根本的に異なる。『十帖源氏』が人物紹介を省くことを不自然だとする意見²⁵もあるが、これは現代的な発想と言える。「絵入源氏」・『首書源氏』・『湖月抄』は別冊付録として『源氏系図』²⁶一冊を備え、『十帖源氏』も巻末に系図を掲載することで事足りりとしたのであろう。『源氏小鏡』が連歌のため、「絵入源氏」が和歌のため、そして『十帖源氏』は俳諧のための書として、それぞれ歌と歌のことばを何よりも大切にして作られた書であった。『源氏物語絵巻』などが示す通り²⁷、登場人物や話の流れよりも歌の場면을重視したのが日本古来の伝統であった。『十帖源氏』は、複雑な人物関係や時間の流れを叙述した長編小説としての源氏物語ではなく、歌を中心とする物語の伝統を受け継ぐ、叙情詩としての魅力を伝える作品だったのである。

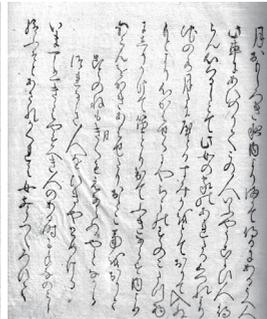
(帝塚山大学 教授)



「絵入源氏」帚木巻



『十帖源氏』帚木巻



『十帖源氏』帚木巻

25 中西健治「十帖源氏攷」(「立命館文学」583,p48-56,2004)、菅原郁子『源氏物語の伝来と享受の研究』(武蔵野書院,2016) p160-179「野々口立園『十帖源氏』の本文構造」(初出、國學院大學・豊島秀範編『源氏物語本文の研究』,2011)

26 注1の拙著 p149-188「版本付録の『源氏系図』」。『源氏系図』は十二世紀から古系図として伝わり、血縁関係に加え人物紹介が記されたもの

27 拙著『国宝「源氏物語絵巻」を読む』(和泉書院,2011)

母語話者・非母語話者によるロシア語訳 『十帖源氏』桐壺巻比較考 —母語話者による翻訳に見る日本文化の受容—

土田 久美子
(つちだ くみこ)

❁ はじめに

本科研の企画により、2015年に筆者は『十帖源氏』桐壺巻を非母語話者としてロシア語に翻訳した。母語話者としての翻訳は、モスクワにあるロシア国立人文大学・日本文学専攻三年生（当時）のマザイ・セリモフ氏が行った¹。彼は、同大学の教授で『紫式部日記』のロシア語訳を手がけた日本文学・歴史学者アレクサンドル・メシェリャコフ氏の教え子である。

まだ来日経験もない大学生による翻訳ということもあり、原文の取り違えはやはり避けられていないが²、一方筆者によるロシア語訳にも、母語話者が見ればロシア語の文法的な誤りや不自然な言い回しが少なからずあるに違いない。だが、誤訳の指摘は本稿の目的ではない。

セリモフ氏のロシア語訳と拙訳を読み比べ、母語話者ならこのような発想で訳すのかと考えさせられた箇所が二点あった。ここに翻訳を通した日本文化の受容の興味深い事例が見いだせるので、報告したい。

1 『『十帖源氏』ロシア語訳データ』『海外平安文学研究ジャーナル』(4.0)、p137-146、2015。

2 例えば、桐壺巻の最後の方の場面、(源氏は)「藤つぼの御ありさまをたぐひなしとおぼし、さやうならん人をこそ見め、にるものもなくもおはしけるかなとおぼせば、おほいどの君には心もつかず。」の下線部分がセリモフ訳では「потому он стал близок с Арухиноуз(госпожой Оотоно)」(そのため彼はアルヒノウエ(オオトノ君)と親しくなった)と訳されており、「藤壺に似た女性がいないので、葵の上と親しくなった」ことになってしまっている。「葵の上」も「アルヒノウエ」と表記されている。(前出(1)p146.)

❁ 1. 紫式部の石山寺における祈り

『十帖源氏』桐壺巻は、『源氏物語』が成立した経緯の説明で始まる。
(下線は筆者、以下同じ)

光源氏物語は、村上天皇女十宮大齋院より、一条院の後上東門院へ「めづらかなる草子や侍る」と、御所望の時、式部をめして「何にてもあたらしく作りてまいらせよかし」と、おほせらる。式部、石山寺にこもりて、此事を祈り申す。折しも、八月十五夜の月、湖水にうつりて、物語の風情空にうかびければ、先、須磨の巻より書きたると也³。

ロシア語訳は『十帖源氏』の現代語訳を基に行われたので、その現代語訳も引用する。

〈村上天皇〉の十番目のお姫さまである〈選子内親王(大齋院)〉が、〈一条院〉の後である〈藤原彰子(上東門院)〉に「新作の物語はありませんか」と、お望みになりました。〈彰子〉は、《紫式部》を呼んで「がんばって《物語》を新しく作ってきてください」と、おっしゃいました。《紫式部》は、《石山寺》に滞在して、この事を祈りました。すると、《八月十五夜の満月》が、《琵琶湖》の水面に映って、物語の風情が頭に浮かんだので、まず、須磨の巻から書いたそうです⁴。

本箇所ロシア語訳はそれぞれ以下の通りである。なお、日本語に訳し戻す際、日本語の音がそのままロシア語の文字で表記されている語句の場合、カタカナで示す。

3 前出(1)p137.

4 同上.

セリモフ訳 第十ая дочь императора Мураками, которую звали Сэнси Найсинно(Дайсайин) однажды спросила у жены Итидэ: императрицы Фудзивара -но Акико (Сёто:монин): “Были ли написаны новые произведения?”.

Императрица Акико обратилась с просьбой к придворной даме Мурасаки Сикибу: “Пожалуйста, постарайся написать новое литературное произведение”.

Пребывая в храме Исияма, Мурасаки Сикибу молилась о том, чтобы к ней снизошло вдохновение. И в ночь пятнадцатого августа, когда на водной глади озера Бива отразилась полная луна, на неё снизошла идея написать свиток “Сумако”.⁵

(センシナイシンノウ (ダイサイイン) と呼ばれたムラカミ天皇の十番目の娘が、ある日、イチジョウの妻フジワラ - ノ アキコ皇后 (シヨウトウモンイン) に尋ねた。「新しい作品が書かれましたか?」

アキコ皇后はムラサキシキブという宮廷婦人に向かって「どうか、新しい文学作品を書くよう努めよ」と依頼した。

イシヤマ寺に滞在して、ムラサキシキブは、彼女に靈感が下りてくるよう祈願した。八月十五日の夜、ビワ湖の水面に満月が映って、彼女に「スマコ」の巻を書くアイディアが下りてきた。

拙訳 Принцесса Сэнси, десятая дочь императора Мураками (Дайсайин; Великая принцесса, служащая в храме Камо), изволила попросить Сёси Фудзивара, монахиню-императрицу Дзётомонъин (супруга-монаха бывшего императора Итидзё), «Есть ли у вас какая-нибудь новая повесть?». Императрица вызвала Мурасаки Сикибу и велела ей, «Сочини как-нибудь новую повесть.»

Мурасаки Сикибу побывала в храме Исияма и молилась об

5 同上.

этом. Как раз в это время полная луна 15-го августа по лунному календарю отразилась в озере Бива, и сцена повести пришла ей на ум. Передают, что именно поэтому она сначала писала том «Сума». ⁶

(センシ皇女、ムラカミ天皇の十番目の娘（ダイサイイン；カモ神社に仕える偉大な皇女）が、フジワラ ショウシ、尼である皇后ジョウトウモンイン（イチジョウ上皇の尼である后）に、「何か新しい物語がありますか？」とお尋ねになった。

皇后はムラサキシキブを召して、「どうにかして新しい物語を作れ」と彼女に命じた。ムラサキシキブはイシヤマ寺に滞在して、このことについて祈った。ちょうどその時、陰暦八月十五夜の満月がビワ湖に映り、物語の情景が彼女の頭に浮かんだ。まさにこのために、彼女は最初に『スマ』の巻を書いたと伝えられている。)

式部が石山寺にこもって「此事を祈り申す」という文を筆者は「молилась об этом. (このことについて祈った)」と逐語的に訳したが、母語話者のセリモフ氏は「молилась о том, чтобы к ней снизошло вдохновение. (彼女に靈感が下りてくるよう祈願した)」と訳しているのが注目される。それに伴い、「物語の風情空にうかびければ、先、須磨の巻より書きたると也」という文がセリモフ訳は「на неё снизошла идея написать свиток "Сумако". (彼女に「スマ^マコ」の巻を書くアイディアが下りてきた)」となっている。靈感が下りてくるよう祈願した結果、アイディアが下りてきたのである。拙訳はやはり逐語的に「сцена повести пришла ей на ум. Передают, что именно поэтому она сначала писала том «Сума». (物語の情景が彼女の頭に浮かんだ。まさにこのために、彼女は最初に『スマ』の巻を書いたと伝えられている。)」である。

セリモフ訳にある「^{ヴダフナヴェーニエ}вдохновение (靈感)」というロシア語は、露和

6 同上.

辞典で「靈感、神の啓示、インスピレーション、意気込み」⁷と説明される単語である。ロシアで文学研究に用いられるダーリ編纂の露露辞典（初版 1863～1866 年）では、「最高の精神的状態・気分；熱狂、集中、尋常ならぬ知的能力の発揮。降臨、天から下された感情の発生」⁸と解説されている。特に「降臨、天から下された感情の発生」という解説が目されよう。現代のオジェゴフ・シュヴェドフ編纂の露露辞典（初版 1949 年）には、「創作的な高揚、創作的な力の上潮」⁹と書かれている。つまり「^{ヴダフナヴェーニエ}вдохновение（靈感）」とは、創作の源となる精神的な高揚であり、それは天から下されたものだという意味合いがあることが分かる。

さらに「^{ヴダフナヴェーニエ}вдохновение（靈感）」という語を理解する手がかりとして、ロシアの著名な詩人アポロン・マイコフ（1821～1897）の詩における次の一節を例に挙げる。

Вдохновенье — дуновенье	靈感（ ^{ヴダフナヴェーニエ} вдохновение） — 神の
Духа Божья!.. Пронеслось —	息の一吹き！…吹き去った —
И бессмертного творенья	そして不朽の創作の
Семя бросило в хаос. ¹⁰	種がカオスの中に蒔かれた。

つまり、「^{ヴダフナヴェーニエ}вдохновение（靈感）」とは神から下された、不朽の創作を生み出す源であることが分かる。

従ってロシアには、不朽の創作は神から下された「^{ヴダフナヴェーニエ}вдохновение（靈感）」によって生まれるという考え方がある。そしてロシア語母語話者の『十帖源氏』翻訳者には、紫式部の石山寺における祈りがこの

7 『露和辞典』p171、東郷正延・染谷茂・磯谷孝・石山正三編（研究社、1992）。

8 В.И.Даль. Толковый словарь живого великорусского языка. В четырёх томах. Том первый.174р. Москва, Издательство “Русский язык”, 1999.

9 С.И. Ожегов и Н.Ю. Шведова. Толковый словарь русского языка. 4-издание,дополнение.71р. Москва, Азбуковник, 1997.

10 1889 年の無題の作品。Классическая русская поэзия. <http://ru-poetry.ru/poetry/6228>

「ヴダフナヴェーニエВДОХНОВЕНИЕ（靈感）」を求めた神への祈りのようなものと理解されたことが、彼の翻訳から伺うことが出来よう。

ロシア語非母語話者の筆者には、上記の通り逐語的な「молилась об этом.（このことについて祈った）」という訳し方しか考えつかなかった。なお、英訳の『十帖源氏』でも、母語話者訳が「prayed about this」、非母語話者訳も「prayed for this」¹¹となっていた。英訳との比較だけで即断は出来ないが、紫式部の石山寺における祈りに「ヴダフナヴェーニエВДОХНОВЕНИЕ（靈感）」という訳語を当てるのは、ロシア語母語話者ならではの発想と考えることができる可能性がある。

❁ 2. 桐壺更衣の病気の原因

次に挙げるのは、帝に寵愛される桐壺更衣が、他の女御・更衣達から受けた恨みが積もったためか、体が弱くなり病気がちであるという場面である。

あまたの女御かうゐそねみて、あさゆふの御みやづかへにつけても、心をのみうごかし、うらみををふつもりにや、あつしく成ゆき〔割・をもき / 病也〕¹²

現代語訳およびロシア語訳は以下の通りである。

大勢の女御や更衣たちはうらやんで、毎日桐壺の更衣が帝の近くにいることに、嫉妬をしてばかりいました。そうやって、他の后たちの恨みをたくさん作った結果でしょうか、体が弱くなっていました。（重い病気です）¹³

11 「英訳『十帖源氏』データ」『海外平安文学研究ジャーナル』（4.0）、p122、2015.

12 前出(1)p138.

13 同上

セリモフ訳 Множество придворных дам и фрейлин мучились завистью и ревновали, что каждый день барышня из двора Павлоний находилась подле императора. Сглаз придворных дам дал себе знать, барышня стала чахнуть. ¹⁴

(桐壺の姫君が毎日皇帝の側にいることに、多くの宮廷婦人や女官は羨望の念に苦しみ、嫉妬した。宮廷婦人達の邪視が威力を見せて、姫君は衰弱した。[重い病気である])

拙訳 Многие Нёго и Кои завидовали ей и постоянно ревновали к тому, что только она служила Государю каждый день. Может быть, в результате того, что она возбудила ревность в других наложницах слишком часто, она ослабела. [Она тяжело больна.] ¹⁵

(多くのニヨウゴとコウイは彼女を羨み、彼女だけが毎日帝に仕えていたことに対し常に妬んでいた。もしかしたら、彼女が他の側室に嫉妬をあまりにも頻繁に引き起こした結果でしょうか、彼女は弱くなった。[彼女は重く患っていた])

「うらみををふつもりにや」を筆者は「Может быть, в результате того, что она возбудила ревность в других наложницах слишком часто (もしかしたら、彼女が他の側室に嫉妬をあまりにも頻繁に引き起こした結果でしょうか)」と逐語的に訳したの対し、ロシア語母語話者は「Сглаз придворных дам дал себе знать, (宮廷婦人達の邪視が威力を見せて)」と訳していて、「^{スグラーズ}сглаз (邪視)」という語が用いられているのが注目される。

「^{スグラーズ}сглаз」というロシア語は露和辞典で「邪視；(呪いによる) 罹病」

14 同上

15 同上

とあり、その動詞「^{スグラージッチ}сглазить」に「邪視する、目で呪いをかける（(不幸・病気などをもたらすように不吉な目で相手をにらむ））」¹⁶とより詳しい意味の説明がある。ダーリ編纂の露露辞典では「^{スグラース}сглаз」は動詞「^{スグラージッチ}сглазить」の名詞形とされ、後者に「目つきによって害する、邪悪な眼差しで注視する」¹⁷などと書かれていた。オジェゴフ・シュヴェドワ編纂の露露辞典でも同様に、動詞「^{スグラージッチ}сглазить」に「古い民間信仰の考え方；邪悪な目（災いや不幸をもたらす眼差し）によって誰かに害を与える」¹⁸という解説があった。

つまり「^{スグラース}сглаз」とは、古い民間信仰の考え方で「不幸や病気をもたらす邪悪な眼差しで見る」ことであるとまとめられる。

伊東一郎氏の研究によれば、悪い眼差しが病気や物理的被害をもたらすという邪視信仰はロシアを含むスラヴ圏に広く見られるものである。スラヴ人において邪視とは悪霊や他者による一種の「妬みの眼差し」であるという。新生児や妊婦、花嫁らが最も邪視を受けやすいとみなされているのだが、それは人生の最も幸福な時期であり、それゆえ最も妬みを受けやすいと考えられたからである。悪霊や他者からの妬みを避け、邪視の被害を受けないようにするために、新生児に親が自分の希望とは逆の、例えば「不器量な子」「かわいくない子」といった名を故意につける習慣すらかつては行われていた¹⁹。

従ってロシアには、幸福な人はそれを妬む者の邪悪な眼差しによって病気になるという民間信仰がある。そしてロシア語母語話者の翻訳者に

16 前出 (7)p2056.

17 前出 (8)том четвёртый, p163.

18 前出 (6)p706.

19 詳しくは、伊東一郎「ロシア民話と民間信仰：邪視の文化史」藤沼貴編著『ロシア民話の世界』p51-67（早稲田大学出版部、1996年）参照。なお同論文には、動詞「^{スグラージッチ}сглазить」には「邪視によって病気をもたらす」の他に「相手をほめることによって悪魔や悪霊の妬みを買ひ、逆に相手に病気や災いをもたらす」という意味もあると説明されているが、『十帖源氏』のロシア語翻訳文においてはこちらの意味では用いられていないため、拙論では扱わない。

は、帝の寵愛を一身に受けた桐壺更衣が病気になるのは、彼女を妬む他の女御・更衣の邪視の威力によるものと理解されたことが、彼の翻訳文から看取することができる。

筆者には、「^{スグラース}сглаз（邪視）」という語を当該の文の翻訳に使用することは全く思いつかなかった。英訳の『十帖源氏』でも母語話者訳は「Perhaps because so many other women bore a grudge towards her,」、非母語話者訳も「Perhaps it was because she was resented so much by other ladies,」²⁰であり、「^{スグラース}сглаз（邪視）」に相当する言葉は見られない。前述の例同様、英訳との比較だけで断言することはできないが、ロシアの民間信仰である「^{スグラース}сглаз（邪視）」の語を用いて桐壺更衣が病気になる原因を翻訳するのはロシア語母語話者ならではの発想と考え得る可能性がある。

❁ 結論

以上、ロシアには、不朽の作品は神から下された創作の源である「^{ウダフナヴェーニエ}ВДОХНОВЕНИЕ（靈感）」によって生まれるという考え方があり、ロシア語母語話者の翻訳者には、紫式部の石山寺における祈りがこの「^{ウダフナヴェーニエ}ВДОХНОВЕНИЕ（靈感）」を求めた神への祈りのようなのだと受けとめられたこと、及びロシアには幸福な人は妬みの眼差しによって病気になるという邪視信仰があり、ロシア語母語話者の翻訳者には、桐壺更衣の病気は彼女を妬む他の女御・更衣の邪視によって引き起こされたようなのだと受けとめられたことが、本論で明らかになった。

筆者はこれまで『源氏物語』における〈語り〉の手法や和歌のリズムと修辞技法、「もののあはれ」といった、外国語への翻訳が困難と予想されるものがどのように翻訳されているのかを明らかにする研究を行ってきた²¹。本科研でも、『十帖源氏』において訳出することが困難であっ

20 前出 (11)p123.

21 拙論『ロシア語訳『源氏物語』の研究—〈語り〉・和歌・もののあはれの観点から—』（2006年度青山学院大学大学院国際政治経済学研究科国際コミュニ

た「地位や官職を表す語」「儀式を表す語」「仏教関係の用語」がどのように翻訳されているかという研究が行われている²²。

しかし、本論で取り上げた紫式部の石山寺における祈りや、桐壺更衣の病気の原因は、特に翻訳困難だと予想される語は用いられていない文である。そうした文の翻訳にも、文化的な差異を見出すことが出来たのである。

従って、本論のように母語話者と非母語話者の翻訳を比較して、母語話者ならではの発想による訳し方、母語話者の国の文化が反映されている訳し方を探る研究方法も、翻訳から日本文化の受容のされ方を明らかにする研究の一つの有効な方法なのではないかと筆者は考える。

(青山学院大学／東京工業大学 講師)

ケーション専攻博士論文)。2015年、関西学院大学出版会よりオンデマンド出版された。

22 浅川槿子「各国語訳「桐壺」(『源氏物語』『十帖源氏]) 翻訳データについてのディスカッション報告」『海外平安文学研究ジャーナル』(3.0)、p77-80、2015。

「交じらふ」女主人公 —ジェンダーコードの視点から読む『とりかへばや物語』—

庄 健 淳
(しょう じょうけん)

❁ はじめに

『とりかへばや物語』において「異性装」はいかなる意味を持つのであろうか。先行研究において、きょうだいたちのそれぞれのジェンダーは「男性的」「女性的」というような、現代的な感覚から自明的なもののように捉えられている。ジェンダーの視点から検討する先行研究の多くも、きょうだいを一対のものとして扱い、その交換可能の論理を中心に論じるものである。小論はそれと方向性を換え、ジュディス・パトラーのジェンダー理論を摂取し、ジェンダーが社会によって構築された一種のパフォーマンスであるとする認識のもと、「男性的」「女性的」と自明視している観念から脱出し、当時の歴史的文脈に基づき、テキストに集約されているジェンダーコードの表出を読み直すことで、文学史の視点から、『とりかへばや物語』を中心として、当時の文学におけるジェンダーに関する言説の構築を解明する。

すでに拙稿で論じていたように、『とりかへばや物語』は「異性装」という新しい題材を使い、「才」の素養を賦与された男装の女主人公を造形し、さらにそれを物語の進行に重要なコードの一つとして用いることで、今までにはない、新たな女性像の造形を試みていると言えるのである¹。これを踏まえ、小論は主にこのような男装時代の女主人公の「交じらふ」ことを考察する。男装時代の女主人公がいかに関心社会で活躍しているのか、また、周囲の人々は彼女にどのような視線を注いでいるのか。「交じらふ」ことをめぐる女主人公、父左大臣および宰相中将の

1 拙稿「『とりかへばや物語』の「異性装」—女主人公のジェンダーコードの分析を中心として—」『立命館文学』中川成美先生退職記念号、二〇一七年三月予定。

意識の差異、およびその対立を描き出すことによって引き出されている女性の生存の苦境などの問題を念頭に置きながら、本文の分析と考察を進めていく。

❁ 一、「交じらふ」女主人公

まず、物語冒頭の該当部分を掲げる。

【引用一】『とりかへばや物語』

いづれもやうやう大人びたまふままに、若君はあさましうもの恥ぢをのみしたまひて、女房などにだに、すこし御前遠きには見えたまふこともなく、父殿をもうとく恥づかしくのみ思して、やうやう御文習はし、さるべきことどもなど教へきこえたまへど、思しもかけず、ただいと恥づかしとのみ思して、御帳のうちにのみ埋もれ入りつつ、絵かき、雛遊び、貝覆ひ、殿はいとあさましきことに思しのたまはせて常にさいなみたまへば、果て果ては涙をさへこぼして、あさましうつつましののみ思しつつ、ただ母上、御乳母、さらぬはむげに小さき童などにぞ見えたまふ。さらぬ女房などの、御前へも参れば、御几帳にまつはれて恥づかしいみじとのみ思したるを、いとめづらかなることに思し嘆くに、また姫君は、今よりいとさがなくて、をさをさうちにもものしたまはず、外にのみつとおはして、若き男ども、童などと、鞠、小弓などをのみもて遊びたまふ。御出居にも、人々参りて文作り笛吹き歌うたひなどするにも、走り出でたまひて、もろともに、人も教へきこえぬ琴笛の音もいみじう吹きたて弾き鳴らしたまふ。ものうち誦じ歌うたひなどしたまふを、参りたまふ殿上人、上達部などはめでうつくしみきこえつつ、かたへは教へたてまつりて、この御腹のをば姫君ときこえしは僻言なりけりなどぞ、皆思ひあへる。殿の見あひたまへる折こそ取りとどめても隠したまへ、人々の参るには、殿

の御装束などしたまふほど、まづ走り出でたまひてかく馴れ遊びたまへば、なかなかえ制しきこえたまはねば、ただ若君とのみ思ひてもて興じうつくしみきこえあへるを、さ思はせてのみものしたまふ。御心のうちにぞ、いとあさましく、かへすがへす、とりかへばやと思されける。

かく言ひ言ひても、幼きほどは今おなづからなど慰めつつさてもあり。やうやう十にも余りたまへどなほ同じさまなるを、こはいかがすべきと、世とともに嘆かしきよりほかのことなかりけり。さりとも年月過ぎば思い知ることのみ待ちたまへるを、をさをさ直りたまふまじく見果てたまふに、なほいとめづらしう世に例なき御心地ぞしたまひける。

(一六七頁～一六八頁)

この部分は、きょうだいたちの性格とそれに伴う嗜好や行動様式を描く重要な場面である。「若君」(男主人公)は、「もの恥ぢ」であり、漢文にあまり興味を示さず、「御帳のうちにのみ埋もれ入りつつ、絵かき、雛遊び、貝覆ひ」などの遊びに耽り、ごく親密な人以外には対面することもできない。逆に「姫君」(女主人公)は外にずっと居り、男の子たちと鞠、小弓の遊びをする。さらに、父左大臣が詩文管弦の会を催すときに、「走り出でたまひて、もろともに、人も教へきこえぬ琴笛の音もいみじう吹きたて弾き鳴らしたまふ。ものうち誦じ歌うたひなどしたまふ」とするのである。とくに注目したいのは、「若君」(男主人公)と「姫君」(女主人公)の対比である。つまり、きょうだいは、それぞれ異なる性別のグループと「交じら」っているのである。

このことは父左大臣の目によって確かめられている。父左大臣は、嘆きながら、成長するにつれて自然に変わるだろうと自分を慰めている。やがて、きょうだいたちは同じ邸に住み、「若君」(女主人公)、「姫君」(男主人公)と呼称を交換するようになる。しかしながら、二人の状況が十歳を過ぎても変わらないことに、父左大臣は苦悩し、心の中で二人の「交じらふ」ことについて、思いをめぐらしているのである。

【引用二】『とりかへばや物語』

I (男主人公) 十二におはすれど、かたなりに遅れたるところもなく、人柄のそびやかにてなまめかしきさまぞ限りなきや。桜の御衣のなよやかなる六ばかりに、葡萄染めの織物の袷、あはひにぎははしからぬを着なしたまへる、人柄にもてはやされて、袖口、裾の袷までをかしげなり。(父左大臣は) いであさましや、尼などにてひとへにその方のいとなみにてかしづき持たらし、と見たまふも、口惜しく、涙ぞかきくらされたまふ。

(一七一頁～一七二頁)

II (女主人公は) いと高き人の子供などあまたるて、碁、双六打ち、はなやかに笑ひののしり、鞠、小弓など遊ぶもいと様異にめづらかなり。(父左大臣は) あないみじのわざや、さてもこれはかくてあるべきことかは、今はともかくもしなすべき方のなきも、今さらにせめて女にとりなすべきやうもなかめり、これ(女主人公)も法師になして人に交じらせず後の世を勤めさせんこそよからめ、と思すも、心々はまたさしもあらじかし、かばかりの宿世なりければい少し言ひどころあることもこそまさらめ、本意深き道心ならぬものから、みないたづらにしなしてやみなんがよしなきよ、など思し碎く。世に似ずつたなかりける宿世かなと、かへすがへす思し知る。

(一七四頁)

春のある日、父左大臣は、きょうだいそれぞれが暮らしている部屋を訪れる。Iは父左大臣が男主人公の物語の姫君にも劣らぬ美質に感動しながら、「尼などにてひとへにその方のいとなみにてかしづき持たらし」と、尼として出家させようと考え、無念の涙を流している場面である。ここで注目したいのは「尼」として出家させる、と考えていることである。それに対して、IIは、父左大臣が女主人公の素晴らしい姿に

感動して、さらに活発に高貴な子供たちと遊んでいるのを見て、「これはかくであるべきこと」と女主人公のありのままの姿を宿命として捉えながら、「法師になして人に交じらせず後の世を勤めさせんこそよからめ」と、法師として出家させようと思慮しているのである。男主人公を「尼」に、女主人公を「法師」にならせることは、一見突飛で常識に外れた話であるが、そこから父左大臣はきょうだいたちの「交じらふ」現実を受け止め、きょうだいたちがそれぞれ身体的に違う性別のグループに「交じら」っていることを認識し、それを変えることができないと諦観しつつも、家を守るために、打算的に行動するのである。父左大臣は、世故に長けた臨機応変な人物として描かれているのである²。

さらに、女主人公について、「人に交じらせず」とあるが、それは宮中への出仕などによって世間と「交じらふ」ことをさせないとする父左大臣の願いと解するのが自然であろう。しかしながら、女主人公の美質は世間の評判となり、ついに帝と春宮の耳にまで届いたのである。「内、春宮にも、さばかり何事もすぐれたるを今まで殿上などもさせせず交じろはせぬことと、つきせずゆかしがらせたまひて、大将殿（父左大臣）にもたびたび御気色あれど」（一七四頁）と帝と春宮は女主人公の出仕を催促して、それを受け、女主人公は元服して、宮廷に出仕することになるのである。

実際、『とりかへばや物語』における「交じらふ」の用例を検証すると、全三十六例ある中、宰相中將に一例、右の大臣の女御に一例、男主人公に五例、それ以外の二十九例はすべて女主人公に使われており、男装時代に集中していることがわかった。そのことから、「交じらふ」は女主人公の造形に関する重要なキーワードであるといえる。それでは、物語全体における、女主人公の「交じらふ」ことはどのような文脈で描かれ

2 新編全集四四三頁の頭注が父左大臣と帝との対話について指摘しているように、「これまでの左大臣は、子を思う闇にくれる父親としての造型が強かったが、ここでは老成した政治家の顔を見せる。息子の進言に安易に同調せず、一つ一つの会話を通して帝の真意を量りつつ、尚侍の立場を固めてゆく言動はしたたかたさえある。計算された会話は興味深い」とあるが、この部分にも同様に、父左大臣の政治家としての側面が窺えるだろう。

ているのか。以下は用例を通じて、分析する。

女主人公が上手に世に「交じら」っている様子は、繰り返し語られている。侍従として出仕し始めたとき、「琴笛の音にも、作り出づる文の方にも歌の道にも、はかなく引きわたす筆のあやつりまで、世の類なく、うち振る舞ひ交じらひたまへるさまのうつくしさ」（一七三頁）と絶賛されている。しかし、輝かしい外見と裏腹、女主人公は、出仕に伴い、我が身の普通でないことを思い知り、嘆いていく。このことは、彼女の「交ら」うことにも影響を来し、引用三のⅠの傍線部が示しているように「身をもてをさめて、もの遠くもてしづめつつ交じらひたまへる」ように控えめにふるまうものの、それは女主人公の意図とは逆に、周囲から「めでた」いものとして捉えられてしまうのである。また、引用三のⅡが示しているように、帝から婿にと望まれ、女房たちから賞でられても、女主人公は、「いとまめやかにもてをさめたる」と、子供のころとは異なって、慎重に世に「交じら」っているのである。

【引用三】『とりかへばや物語』

Ⅰ この君、なほ幼きかぎりは、わが身のいかなるなどもたどられず、かかる類もあるにこそはと心をやりてわが心のままにもてなし振る舞ひ過ぐしつるを、やうやう人の有様を見聞き知り果て、もの思ひ知らるるままには、いとあやしくあさましう思ひ知られゆけど、さりとて今はあらため思ひ返してもすべきやうもなければ、「などでめづからに人に違ひける身にか」とうちひとりごたれつつ、もの嘆かしきままに、身をもてをさめて、もの遠くもてしづめつつ交じらひたまへる用意など、いとめでたきを、

（一七八頁）

Ⅱ よからぬ身を思ひ知りながら、あり初めにける身をえもて隠しやる方なくて交じらふにこそあれ、何かは目の止まらん。いとまめやかにもてをさめたるを、さうざうしく口惜しと思ふ

人多かり。

(一八〇頁)

このような女主人公の心情は、親しく近い人たちでも察知されるものではない。女主人公の出仕は父左大臣の想定外のことであり、次に示す引用四の枠で囲んでいる部分で示しているように、「世づかぬ」身は女主人公を悩ませるだろうと予測しながらも、女主人公がその才能を発揮し、うまく世に「交じら」い、順調に昇進していく様子を見ると、父左大臣は次第に安堵していくのである。

【引用四】『とりかへばや物語』

I 父左大臣は、四の君の懐妊に驚くが、真相をたださず

殿は、いとあやしうあさましきことかな、中納言、今はさる方に世に並びなく交じらひたちたれば、世づかぬ身を知るともさのみ思ひ嘆くべきならぬを、世とともにいみじくもの思はしげなる気色なるも、かやうにしたにあやしきことのありける乱れにや、と聞き驚かれたまへど、いかなることぞと問ひ聞こえたまはんも、今はいと恥づかしげなるさま、親と言ひながら憚られて、え聞こえ出でたまはず。

(二二三頁)

II 父左大臣、吉野から帰ってきた女主人公の落ち着いた様子に安堵を感じる

世づかぬ御有様を、今はさるべきなりけりと、かかるさまにつけてもめでたくすぐれて世に交じらひつきたまへば思し慰みはてつるに、うれしくいみじと思したる御気色、いとあはれなり。

(二五二頁)

Ⅲ 女主人公の病気を嘆く父左大臣

「あやしう思はずなるさまども」を、身の厄と思ひしに、命も尽くる心地しき。今は官位きはめ、出で交じらひたまふ際になりては、公私、人にほめられ、面目あり。はかばかしからぬ身の面起こしたまへば、その嘆きをも慰みて、さるべきにこそありけめと憂へを休むる際に、かうのみ例ならず心地悪しげなるよりも、もの思ひ嘆かれたる気色の見ゆれば、いとこそわびしう生けるかひなけれ」とてうち泣きたまふに、

(三〇〇頁)

Ⅳ 女主人公の失踪を受けて、父左大臣の心中思惟

げにさもあらん、あやしと思ひて、いとかしこく心深かりし人にて、世づかぬわが有様を人に見え知られぬ、さてはいかでか交じらはんと思ひて、隠れたるなりけり、と心得たまふに、かなしく、かかることぞと言はず、心ひとつに思ひあまり身を失ひてけるよ、と泣きこがれたまふに、

(三三〇頁)

父左大臣は、女主人が世に「交じらふ」ことを「世に並びなく」「めでたくすぐれ」ており、「公私、人にほめられ、面目あり」と捉え、それによって「とりかへばや」という嘆きも慰められ、四の君の妊娠事件や、女主人公が吉野を訪れることやその後の「病気」などの出来事があるたびに、それを持ち出して自ら安堵するのである。女主人の失踪を聞いても、事情の複雑な背後を察知せず、ただそれは「世づかぬ」身が露見して、世に「交じらふ」ことができなくなったのだと単純に推測しているだけである。

実際、女主人公のことにに関してだけでなく、男主人公の参内を決定することからも、父左大臣が、きょうだいたちの「異常」を知りながらも、時勢に合わせて、きょうだいたちの「交じらふ」ことを決定する世故に長けた一面が窺える。帝と春宮の要請によって女主人公を出仕させるだ

けでなく、入内の要請は断るが、帝（朱雀院）から女春宮の「御遊びがたき」として参内するようにとの要請に対しては、「さほどの交じらひは仕うまつりもやせん」と判断して、男主人公を尚侍として参内させるのである。

きょうだいの身分の交換に対する配置も、父左大臣のこの一面の現れである。女主人公の失踪を受け、男主人公は今までの女装の姿を変え、男装を身に纏い、女主人公を探し出した後に京に戻り、父左大臣にそのことを報告する。「あえかに人にも見えず籠りたまひてし」（三七八頁）男主人公が上手く「交じらふ」ことができるかと心配している父左大臣は、「ただ大将の御にほひ有様ふたつにうつしたる」（三七八頁）男主人公の姿に安堵した。そして、女主人公が女姿に変わったとの報告を聞き、父左大臣は喜んで、「この人を尚侍にと聞こえて、そこにこそは代はりしたまはめ」（三七八頁）と二人の交換を即断し、男主人公に関しては馴れるまでに人前に出ないようにと言い付けるのである。

【引用五】『とりかへばや物語』

男主人公から女主人公の現状を聞いた父左大臣の即断

ためらひて、「さて、いかに聞き出でたまへりや」と問ひきこえたまふ。「しかありし御様にはあらず。女様になりて、『なほいと世づかず心憂かりしかば、もとのやうに身を変へころみんとてなほしばし隠れたりつる。髪などの生ふるほど人に見え知られじ』となんのたまへしを、御気色にしたがひてこそは」と申したまふも、「いかにいかに」と聞きもやりたまはず、まさしかりける夢の告げかなと、うれしさに喜び泣きさへしたまひて、「よし。この人を尚侍にと聞こえて、そこにこそは代はりしたまはめ」とのたまへば、「年ごろさて籠りるはべりし身なれば、さやうの交じらひはしはべらじ。またかの御有様聞きさだめて、しばしかくてさぶらふと人にも見え知られはべらじ。まづかの御迎へして、後にを」とて、明けぬれば出でたまひぬ。

（三七八頁～三七九頁）

このように、きょうだいたちのそれぞれの性質に対して、手放しの状態で、ただ「とりかへばや」と嘆くばかりに見える父左大臣は実際に主人公たちの「交じらふ」ことを時勢に合わせて配置しているのである。きょうだいたちのジェンダー的な逸脱を問題視しながらも、単純に否定するのではなく、二人の「交じらふ」ことの性質を把握した上で、家の繁栄に役立つ形で、きょうだいの「交じらふ」ことをオルタナティブに決定するのである。しかし、父左大臣が見逃しているものこそ、世に「交じらふ」ことに対する女主人公の複雑な心情である。次節は、いくつかの場面を通じて、それについて検討する。

❁ 二、「ひたおもて」なること

女主人公が抱く、自らの「交じらふ」ことに対する否定的な感情は、前節においてすでに分析したように、出仕当初から抱いていたものである。その後、四の君の妊娠事件、加えて宰相中將に見破られ、強引に結んだ契りによる妊娠などの身分の露見に関する出来事によって、その自己否定がだんだんと強まっていくのである。実際、現実の出来事以外、女主人公が「ひたおもて」なることに対する認識も、彼女の「交じらふ」ことの否定と関連していると考えられるのである。

【引用六】『とりかへばや物語』

女御は、御几帳うるはしくさしていみじくもてなしかしづかれたまふさまの、心にくくめでたきを、あはれ、我も世の常に身をも心をもてなしたらましかば、かならずかくてぞ下り上らまし、あないみじ、ひたおもてにて身をあらぬさまに交じらひ歩くは現のことにはあらずかし、と思ひ続けるに、かきくらさるる心地して、

月ならばかくてすままし雲の上をあはれといかなる契りなるらん

我こそ契つたなくてかからめ、姫君だに世の常にてかやうの交

じらひしたまはましを飽かぬことなからまし、身を嘆きても、
ひとりは世の常にておはすと見てこそはかやうの下り上りのか
しづきもせまし、など、わが身ひとつのことを思ひ続けるに、
これより出でてやがて深き山に跡も絶えなまほしくおぼゆるあ
ままに、とばかり見送られて、

(一八八頁)

九月十五日の夜、御宿直の折に、女主人公は、梅壺女御が夜の御殿にお上りになるのを目撃している。梅壺女御は、御几帳をさし巡らし、丁寧に傳かれている。このことは、女主人公は自分がもし普通の身であればこのようであるべきなのに、「ひたおもてにて身をあらぬさまに交じらひ歩くは現のことにあらずかし」と、自分の顔をあらわにし世に「交じらふ」ことに対する否定的な感覚が芽生えたのである。わが身を嘆きながら、女主人公は、「姫君だに世の常にてかやうの交じらひしたまはましを飽かぬことなからまし」と「姫君」(男主人公)がもし「世の常」のように「交じらふ」ことができれば自分も満足するだろうと思っているのである。

小学館新編日本古典文学全集本では、この部分について、「自らのうちの女の性を自覚し、せめて姫君だけでも栄華を生きられるならばと夢見る思考の中に、女としての生が肯定的に把握されている点に注意したい」(一八九頁)と指摘している。確かに、「雲の上」に棲むという詠歌からは、女主人公の向上心も読み取れるものの、性別に由来する特別な発言とは考えられないため、「女の性を自覚し」、さらに「女としての生が肯定的に把握されている」と解釈されることには首肯できない。ここで女主人の嘆きを催すのは、あくまで「下り上り」の際に、「御几帳うるはしくさしていみじくもてなしかしづかれたまふ」女御と、「ひたおもてにて身をあらぬさまに交じらひ歩く」自分との対比である。女主人公は、そのようにかしづかれながら「交じらふ」ことは自分には到底できないので、せめて男主人公に「かやうの下り上りのかしづきもせまし」と切に願っているのだけなのである。

平安時代の作品を調べると、「ひたおもて」という言葉の用例自体は少ない。『源氏物語』に四例と『夜の寝覚』一例、そして『紫式部日記』の二例である。『源氏物語』と『夜の寝覚』の用例が男女の仲に限定して使用されているのと比較して、『とりかへばや物語』における「ひたおもて」で「交じらふ」ことに対する否定的な意識は、次に挙げる『紫式部日記』の記述と類似しているのである。

【引用七】『紫式部日記』

I 五節の舞姫が歩いて入場する。

東の、御前のむかひなる立部に、ひまもなくうちわたしつともしたる灯の光、昼よりもはしたなげなるに、あゆみいるさまども、あさましう、つれなのわざやとのみ思へど、人の上とのみおぼえず。ただかう、殿上人のひたおもてにさしむかひ、脂燭ささぬばかりぞかし。屏幔ひきおひやるとすれど、おほかたのけしきは、同じごとぞ見るらむと、思ひ出づるも、まづ胸ふたがる。

(一七五頁)

II 童女御覧の儀

下仕への中にいと顔すぐれたる、扇とるとて六位の蔵人どもよるに、心と投げやりたるこそ、やさしきものから、あまり女にはあらぬかと思ゆれ。われらを、かれがやうにて出でるよとあらば、またさてもさまよひありくばかりぞかし、かうまで立ち出でむとは思ひかけきやは。されど、目にみすみすあさましきものは、人の心なりければ、いまより後のおもなさは、ただなれになれすぎ、ひたおもてにならむやすしかしと、身の有様の夢のやうに思ひつづけられて、あるまじきことにさへ思ひかかりて、ゆゆしくおぼゆれば、目とまることも例のなかりけり。。

(一七九頁)

引用七のⅠは、五節の舞姫たちが参上して、昼よりも明るい灯の光によって「殿上人のひたおもてにさしむかひ」する状態になっているのに対して、自分は、「屏幔ひきおひやる」が、同じく顔があらわになるだろうとする紫式部の危惧が描かれている。またⅡでは下仕えの童女が平気に扇を六位の蔵人に投げやるのを見て、「あまり女にはあらぬか」を批判しながら、自分もついこのように男と直接顔を合わせることを平気になってしまうだろうと紫式部が思っている様子が描かれている。紫式部の自己意識は自分の将来に起こりうることに対するものであるという相違はあるものの、物語本文傍線部から伺えるように、女主人公が「あないみじ、ひたおもてにて身をあらぬさまに交じらひ歩くは現のことにあらずかし」と「ひたおもて」で人と接していることに対する意識は、Ⅱの紫式部が「ひたおもてにならむやすしかしと、身の有様の夢のやうに思ひつづけられて、あるまじきことにさへ思ひかかりて、ゆゆしくおぼゆれば」とする認識と類似しているのである。

しかしながら、女主人公と比較すると、『紫式部日記』に見られる紫式部は、常に社会規範と照合しつつ、女性としての自分を凝視しているのである。例えば、弟の惟規より才能は優れているが、「をのこだに才がりぬる人は、いかにぞや、はなやかならずのみはべるめるよ」（『紫式部日記』二〇九頁）と周りの人が才能を披露することを戒めているのを聞き、紫式部は「一といふ文字をだに書きわたしはべらず、いとてづつに、あさましくはべり」（『紫式部日記』二〇九頁）と無学を装う。それに対して、『とりかへばや物語』の女主人公は、「交じらふ」ことに対する複雑な心境を持ちながらも、決して自分が女性であるという意識を前面に出し、あえて自分の持つ才能を隠すなどのようなことはしないのである。妊娠の身を抱え、宇治隠棲を控えている最後の春においても、作文し舞踏する女主人公が、むしろ、それに反する、思う存分才能を発揮する人物として描かれているのである。

ここで、もう一つ問題になるのは、「姫君（男主人公）だに世の常にてかやうの交じらひしたまはましを飽かぬことなからまし」とする女主人公の願望である。これは前節の引用二のⅠで説明したように、父左大

臣が姫君（男主人公）を「尼などにてひとへにその方のいとなみにてか
しづき持たらし」とする願望と同様、男主人公の「交じらふ」グルー
プは女性であることを認識した上での発言である。しかし、「尼」にす
ること、つまり社会に「交じらふ」こと自体を禁じる父左大臣の願いと
は違い、女主人公は、男主人公が「交じらふ」ことを期待し、さらに自
分もその「かしづく」役を担うつもりである。このように、異常な身体
を持つと意識しながらも、「交じらふ」ことを絶つのではなく、自分の
性質に合わせて、世と「交じらふ」というのが、女主人公が考えている
「世の常」なのである。

その後、男主人公は、朱雀院の要請によって、女春宮のもとに尚侍と
して出仕する。これは、「この大殿の姫君、婿取り、内裏参りの方は思
ひ絶えてきこしめす」（一九三頁）院からの要請である。さらに、この
出仕は、物語の地の文では、「世の常なるべき御交じらひにもあらぬに」
（一九四頁）と言われているように、周囲からは決して「世の常」の出
仕として捉えていないのである。女主人公は、「下り上りの御かしづき」
をするなか、男主人公と慣れ親しんでいく。新年、几帳を隔てて対面し
ている男主人公を見て、女主人公は再度、「わが身はさるものに言ひお
きて、この御有様をだに例の人と見たてまつらばや」（二〇〇頁）と願っ
ている。つまり、女主人公は男主人公の「交じらふ」グループの性質を
把握し、そのグループに上手く「交じらふ」ことを手伝い、それを実現
させることを「世の常」「例の人」というような、社会一般の規範だと
認識しているのである。

しかし、この認識は、宇治隠棲のとき、「ひたおもて」なることを以っ
て女姿に変えた女主人公を批判する宰相中将とは、全く性質の違うもの
である。それによって生じる二人の対立も、予想できることであろう。
次節では、この点について分析する

❁ 三、「世の常」なること

実際、宰相中将は、父左大臣と同じく、女主人公が「交じらふ」ことの素晴らしさを認め、常にそれに気圧されているのである。女主人公が上手に世に「交ら」っている様子は、女主人公が身籠っている身を抱え、すでに宇治での隠棲を約束しているにも関わらず、宰相中将の劣等感を催すのである。このことは、以下の引用から端的に読み取れるのである。

【引用八】『とりかへばや物語』

内裏に参りたまへるに、見たてまつる人ごとに目を驚かしたり。宰相の中将も、人よりことなるさまして参りあひて、見るに、かばかりにて交じらひそめ、世のおぼえ有様かくもてなされたるに、身を変へにくからんや、と胸つぶれて、目をつけて見れど、いと大方にもてすくよけ、え行きあはず。尚侍の御方に参りたまへるに、殿上人、上達部あまたさぶらへば、出で居もてはやすも、今はかやうの交じらひはしたなく苦しけれど、いかがせん。宰相に琵琶そそのかして、「梅が枝」うたひたる声も、いみじうめでだし。宰相は、この人にうつろひては慰みにし心なれど、なほあさましう心強くて止みたまひにしと思ひ出づるに、胸心しづかならでまかでぬ。(三〇二頁)

身重な状態で、新年の内裏に出仕している女主人公は、自分のことを「今はかやうの交じらひはしたなく苦しけれど、いかがせん」と思っているが、彼女の晴れ姿は人々を魅了するのである。それを目にして、女主人公の心情を察知できない宰相中将は、「見るに、かばかりにて交じらひそめ、世のおぼえ有様かくもてなされたるに、身を変へにくからんや」と、彼女が「交らひ」そめ、周囲にめでられるのを投げ捨て、姿を変えるのは困難ではないかと危機感を覚えるのである。その後、三月観桜の宴にも、女主人公が才能を思う存分発揮し、さらに官位も昇進したことに対して、宰相中将は、「いみじかりける容貌、才のほどかな、か

かる身をもて埋もらさんことも、我になりて思ふに、難しかし」(三〇五頁)と女主人公が意を変えるのを心配して眠れぬ夜を過ごしたのである。宰相中將のこうした屈折した心境は、つい女主人公に対する抑圧へと導かれたのである。女主人公が宇治に着き、女姿に身を変え、そこで一瞬の動揺を見せると、宰相中將は、「世の常」を以って、彼女を批判するのである。

【引用九】『とりかへばや物語』

I わが心は、いかにしつる身ぞとのみおぼえて、世の中のこともいぶせく、ほればれとして、もののみかなしければ起き上がりぬを、中納言はかなしと思ひて、「これこそ世の常のとなれ。年ごろの御有様は、現しごととや思しつる。もとより直面にさし出でてあまねく人に見え交じらはんの御好みに、ことさら交じらひたまひしにこそありけれ。めでたくとも、わが身をあらぬに変へて過ぐしたまへること、あるべきことならず。あやしくとも、かくておはせんこそ例のとなれ。殿にも聞かれたまはん、さらに悪しとよに思ひきこえたまはじ」と言ひ知らせ、あはむるに、げにとことわりに恥づかし。わが身の例ざまならばこそあらめ、ありしながらならずとも、命だにあらば誰にも対面することもやと思ひ慰めてあるに、

(三二五頁～三二六頁)

II 今はわが身かくてあるべきぞかしと思ひ知りなよなよともてなしたるは、ありし人ともおぼえずらうだけにとをやかなるを、すべて限りなく思ふさまなるを、昔より寝ても覚めてもかやうならん人を見ばやと願ひしに、仏神のわが思ひをかなへたまふなりけりと思ひ喜び、いかで悔しと思はせじ、ありし世にを思ひ出でさせじとよろづにもてなすに、いかに慰みゆく。

やうやう、その人の、とありし、かかりし、言ひしなどやうのことさへ、さし並びにし身なれば思ひ出でらるる折々多かる

を、みづからは、人近くもてないてたることの好ましきぞと言ひ恥ぢしめらるるも聞きにくければ、さらぬ顔に忍び過ごすほどに、

(三三三頁～三三四頁)

引用九のⅠは女姿に変えたわが身はどうなってしまったものか、また宰相中將との鬱陶しい仲などをとりとめなく思っている女主人公に対し、宰相中將は、「もとより直面にさし出でてあまねく人に見え交じらはんの御好みに、ことさら交じらひたまひしにこそありけれ」と彼女を批判し、さらに、その「交じらふ」ことは、「めでたく」ても、あるべき姿ではない。現在のように女姿でいるほうが普通であり、たとえ父左大臣に聞かれてもそれを認めるべきなのである、と述べる。女主人公は道理に叶った発言だと思い、自らを恥ずかしく思うのである。

Ⅱの部分で、宰相中將はすっかり女姿に慣れてきた女主人公こそが仏神の賜りものであり、自分の日々望んでいる理想的な相手と考え、何とかして彼女を後悔させることなく、過去のことを思い出させることなく慰めたいと考えるのである。しかし、だんだんと過去のことを懐かしく回想し始める女主人公は、引用七のⅠのように宰相中將にからかわれるのを聞くのも辛いと思っているので、「さらぬ顔に忍び過ごす」とそしらぬ顔で黙ったまま過ごしたのである。

このように、宰相中將が認識している「世の常」は、女主人公が認識しているのものとは全く性質の違うものなのである。思う存分才能を発揮し、男姿として世に「交じら」っていた輝かしい過去は、女の身は「ひたおもて」であるべきではないとの宰相中將の一言を以って、すべてが否定されてしまう。そのため、女主人公は深く傷ついてしまい、常に自分に沈黙を強いている。

佐野佳矢乃は、宰相中將と女主人公との細やかな心理的な交流を追い、宰相中將を「(女主人公に→筆者注)劣等感を抱くほどに、高く女主人

公の個性を評価する承認者であった」と説明している³。確かに、親友として二人の親密な交流が存在し、宰相中將の前でより自由に自己表現ができる女主人公の一面も窺える（「泣くべき折はうち泣き、をかしく言ひたはぶるる折はうち笑ひ」、三六〇頁）が、引用八が示しているように、宰相中將は女主人公の苦悩を理解できず、女主人公の素晴らしさは愛すべきものというより、却って彼の不安を誘うものになってしまうのである。さらに引用九で、宰相中將はジェンダー規範を持ち出し、女主人公を抑圧し、その輝かしい過去を否定しようとしていた。それゆえ、宰相中將の前で、「泣くべき折はうち泣き、をかしく言ひたはぶるる折はうち笑ひ」（三六〇頁）していた女主人公は、「さらぬ顔に忍び過す」（三三四頁）「見知らぬ顔」（三三九頁）と、宰相中將との心を通じ合う交流を断っているのである。このように、女の姿となった女主人公は、宰相中將との意識の対立について、表立って反抗するのではなく、沈黙を以って抗っているのである。

この「交じらふ」ことをめぐる意識の対立は、二人の関係を決定的に不可能なものにしてしまうのである。男装に変えた男主人公を女主人公と誤解し、その帰京の姿を目にした宰相中將は、彼女宛てに手紙を渡す。その手紙を目にして、彼女がまず思い出すのは、「常に、あらましごとにてだに、直面にあらまほしげにて過ぎにし方を恋ふると言ひあはめしものを」（四一五頁）とかつて宰相中將に常に「直面」なる過去を非難されることである。そこから、女主人公にとって、宰相中將との関係で、それが一番許しがたいことだとわかるだろう。また、一方で、宰相中將との対立は、ある意味当時の女性の生存の苦境を反映しているのである。紫式部のように、無学を装うのではなく、思う存分才能を発揮しようとする、女主人公のように、女性であるゆえ、社会規範によって非難されざるをえないのである。

3 『『とりかへばや物語』宰相中將の人物像について—好色者らしからぬ好色者—』『日本文學』一〇九号 二〇一三年

❁ おわりに

男装時代の女主人公がいかに宮廷社会で活躍しているのか、また、周囲の人々は彼女にどのような視線を注いでいるのか。以上、「交じらふ」ことをめぐる女主人公、父左大臣および宰相中將の意識の差異、およびその対立を描き出すことによって引き出されている女性の生存の苦境について分析した。

男装の女主人公をめぐる、父左大臣、女主人公自身、そして宰相中將はそれぞれ異なる思惑を持っているのである。父左大臣は、きょうだいたちの「異常」を知りながらも、時勢に合わせて、きょうだいたちの「交じらふ」ことを決定することで、物語の展開を大きく推進している。女主人公は、身分の露見を恐れるためだけでなく、自身に対しても「ひたおもて」なることに対する違和感を抱えている。こうした思いに対する描写は、『紫式部日記』を踏襲していると考えられる。しかしながら、常に社会規範と照合しつつ、女性である自分を規定する紫式部と異なり、女主人公は、「交じらふ」ことに対する複雑な心境を持ちながらも、決して自分が女性であるという意識を前面に出し、あえて自分の持つ才能を隠すなどのようなことはしないのである。女主人公は男主人公の「交じらふ」グループの性質を把握し、そのグループに上手く「交じらふ」ことを手伝い、それを実現させることを「世の常」「例の人」というような、社会一般の規範だと認識している。これは女主人公が考えている「世の常」であるが、宰相中將が理解している「世の常」と対立している。男姿として世に「交じら」っていた輝かしい過去は、女の身が「ひたおもて」であるべきではないとの宰相中將の一言を以って、すべてが否定されてしまう。このことは、つい二人の関係を不可能にしてしまうのである。

女性、特に才能を有する女性は、如何に生きるべきか。女主人公の遭遇は、まさしく当時の有能の女性の生存の苦境を反映しているのである。異性装を通じて、一時的に自分の才能を思う存分発揮できるとしても、一旦女の姿に変えると、また再度「女」という規範に縛られざるをえな

いという苦い現実である。

※本稿における『紫式部日記』『とりかへばや物語』の本文引用は新編日本古典文学全集による。なお、傍線と括弧内の内容は筆者によるものである。

(立命館大学 大学院博士後期課程)

研究の最前線



「訳し戻し」という「翻訳」

藤井 由紀子
(ふじい ゆきこ)

先日、高大連携事業の一環で、高校で出張講義を行った。「文学」という広い範囲での講義依頼であったため、私の専門とする平安時代の文学に、必ずしも全員が興味を持っているわけではないだろうと考え、『源氏物語』桐壺巻の冒頭の一文について、古文の解釈を示した上で、日本語の現代語訳や、英語の翻訳をいくつか並べて紹介してみた。

興味深いことに、高校生の反応が一番よかったのは、アーサー・ウェイリーの英訳と、エドワード・サイデンステッカーの英訳を比較したときであった。このジャーナルをお読みになっている方々には、わざわざ説明の必要もないかと思われるが、便宜上、当該箇所本文と両者の訳文を挙げておく。

▼『源氏物語』桐壺巻

いづれの御時にか、女御更衣あまたさぶらひたまひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。

▼アーサー・ウェイリー訳

At the Court of an Emperor (he lived it matters not when) there was among the many gentlewomen of the Wardrobe and Chamber one, who though she was not of very high rank was favoured far beyond all the rest.

▼エドワード・サイデンステッカー訳

In a certain reign there was a lady not of the first rank whom the emperor loved more than any of the others.

高校生は、そもそも、日本語を母語とする自分たちでさえも理解しにくい古文が、外国人によって翻訳されていること自体に驚きを覚えていた。さらに、構文理解すら難しいウェイリー訳を読んだあとに、簡潔で

わかりやすいサイデンステッカー訳を読み、同じ一文がこれほどまでに違う形で翻訳されているということに、衝撃を受けたようだった。「翻訳っておもしろいよね」という私の問いかけに、大きく頷いていた高校生の姿が印象的で、高校教育の現場でも、比較文学・対照言語学的な視野からの教材がもっと用いられてもよいのではないかと感じた次第である。

さて、このときの授業では、ウェイリーの英文が難解なこともあって、高校生の読解の手助けとして、佐復秀樹氏による、訳し戻しの日本語訳（『ウェイリー版 源氏物語』平凡社ライブラリー 2008年）も提示しておいた。

▼佐復秀樹訳

ある天皇の宮廷に（彼がいつの時代に生きていたのかはどうでもよい）、衣装の間や寝室につかえる女性たち（更衣・女御）が大勢いたなかに、とても身分が高いわけではなかったが、ほかの者たちよりもはるかに寵愛を受けている人がいた。

この佐復氏の訳し戻しは、刊行当時に私自身も興味深く読んだし、web上の一般読者の書評などからも好評を博していることがわかる。今、改めて、この冒頭の一文について考えてみるならば、一読してわかる通り、佐復訳の工夫は、原文の「女御更衣」をウェイリーが「the many gentlewomen of the Wardrobe and Chamber」と訳したところを、「衣装の間や寝室につかえる女性たち」といったん直訳しつつ、「更衣・女御」という元の言葉（英文での順番に従って、原文とは逆の順になってはいるが）をその後に補っている点にある。逆に言えば、「更衣・女御」を補わなければ、「衣装の間や寝室につかえる女性」とは何であるのか、日本語を母語とする読者には伝わらないという判断があったことが窺われる。英語能力に乏しい私には、「the Wardrobe and Chamber」という語が、どのようなニュアンスを持つかがわからない。「衣装の間や寝室につかえる」という日本語が、はたして英語のニュアンスをど

れだけ伝えているのか、それも判断できない。わかることは、補足をしなければならぬ程度には「女御更衣」という原文の言葉から距離が離れているということ、そして、いったん「the many gentlewomen of the Wardrobe and Chamber」と訳された「女御更衣」は、決して「更衣・女御」には訳し戻せないということである。そのことは、佐復氏自身によって、「ウェイリー訳に相当する日本語を補ったもの」については「くれぐれも（中略）正確に対応するとは思わないでもらいたい」と注意が促されていることから確認される（平凡社ライブラリー「あとがき」）。本科研では、『源氏物語』の各国語訳が、日本語に訳し戻され、それを用いて、元の各国語訳に対しての考察を行うということがなされた。たしかに、『源氏物語』の研究者で、諸外国語にあまねく通じた者など皆無と言ってよいであろうし、言語の壁によって翻訳研究がなおざりにされるくらいであれば、訳し戻しを利用するのは有効な手段だと考えられる。ただし、訳し戻しもまた、ひとつの「翻訳」であるということには忘れてはならないと考える。訳し戻しを基にした翻訳理解に対する懸念は、本科研第6回研究会の席上でも述べた（ジャーナル vol.3 参照）。訳し戻しによる日本語の文章は、結局は、それを担当した訳者のひとつの「作品」なのであり、どんなに直訳をお願いしたとしても、別の言語に移した時点で、訳者というフィルターを通過した「別物」になっているはずである。以前、サイデンステッカー氏にインタビューを行った際、彼が「翻訳は贋金づくりだ」と言っていたことを思い出す。翻訳の訳し戻しは、いわば、贋金からさらに贋金をつくる作業なのであろう。

このように言ってしまうと身も蓋もないように聞こえるが、贋金のさらなる贋金である訳し戻しに価値がないと言いたいわけではない。実際、イタリア語やロシア語の訳し戻しを読んでみて、大変おもしろかったのも事実なのである。同じ翻訳の訳し戻しでも、担当者によって訳し方にはもちろん差があり、その「揺れ」に含まれた問題点を見つけることが、元の翻訳の問題をもあぶりだすことに繋がるのであろう。それぞれの言語のニュアンスや、各国の文化的背景なども考えつつ、その言語に精通した人間と、古典本文に精通した人間が、相互に意見交換しながら、翻

訳自体を丁寧に読み進めていく作業が、今後も継続して行われる必要があるように思われた。

(清泉女子大学 准教授)

英訳『今昔物語集』兵と戦いの世界

浅川 槇子
(あさかわ まきこ)

❁ 1 はじめに～各国語に翻訳された『今昔物語集』

今まで『海外平安文学研究ジャーナル』では、各国語訳『源氏物語』（英語・フランス語・中国語・ロシア語・スペイン語・イタリア語・ウルドゥー語）のほか、『伊勢物語』（英語・スペイン語・フランス語）と『宇津保物語』（中国語との比較）についての論文・報告が掲載されている。作中人物の呼称、色、官職名、物語全般における問題点など、その視点はさまざまである。

稿者も『源氏物語団扇画帖事物索引』¹を使用し、スペイン語訳とイタリア語訳『源氏物語』において、作中に登場する言葉を7種類に分類し、整理と考察を行ってきた。翻訳された底本はArther Waleyなどの英訳からの重訳がある一方、古典文学の本文から翻訳されたものもある。底本が1種類でないということだけでも、「世界文学」と言われる『源氏物語』への関心が根強いことがよくわかる結果となった。

このように『海外平安文学研究ジャーナル』には、種々の作品とテーマによる論文・報告を掲載することができたものの、本科研で発行するジャーナルは今回の第6号が最後となる。しかし、数多い平安文学作品の大多数を網羅できたわけではなく、まだ扱っていない作品が数多く存在する。このたびは今まで本科研で取り上げなかった、平安時代の代表的説話集である『今昔物語集』のうち、武人に関する説話（巻23-13～16、巻25）に焦点をあて、「兵」とよばれた武人と、彼らが戦いに用いた「武具」をあらわす語について整理・考察してみることにする。

1 「国文学研究資料館蔵『源氏物語団扇画帖』事物索引」(p.156～p.167) (国文学研究資料館編『源氏物語 千年のかがやき』、思文閣出版、2008年9月)

❁ 2 英訳『今昔物語集』の書誌

そもそも『今昔物語集』の翻訳は、こういった書籍が存在するのであろうか。本科研の「平安文学翻訳史年表」で確認をしてみたい。『今昔物語集』で検索をかけると翻訳史年表には53件が収録されている²。そのうち最古の翻訳はMichel Revonによるフランス語訳(抄訳)である。Anthologie de la littérature japonaise : des origines au XXe siècle (C. Delagrave, 1910) という雑誌に、『古今和歌集』や『土佐日記』などの翻訳とともに掲載された。翻訳言語については、英語に翻訳されている書籍が一番多いものの、ベトナム語やポルトガル語への翻訳も見るができる。また、説話の数が多いことから、抄訳も目立つ。英訳ではRobert Hopkins Browerによる翻訳が最も古く、最も新しい翻訳は、Naoshi Koriyama (郡山直) と Bruce Allen (ブルース・アレン) によるものである。(2)以降の書籍においては、過去に出版された翻訳を重訳することがなく古典の本文から翻訳されているという傾向がある。

(1) Robert Hopkins Brower (ロバート・ホプキンス・ブラウワー) 訳

書名	<i>The Konzyaku Monogatariyu : an historical and critical introduction, with annotated translations of seventy-eight tales</i>
出版社	University Microfilms International
刊行年月日	1952年
再版・重版	1985年
底本	芳賀矢一纂訂『攷証今昔物語集』(富山房、1913～1921年) ※1923年の関東大震災で焼失した田中頼蔵蔵本(巻31は元から欠)
翻訳の範囲	本朝仏法・世俗部にあたる巻11～巻31から1～8話を採録し、抄訳したものである。
翻訳の特徴	底本に忠実な訳がされ、空白がある場合はその部分も示している。
備考	『日本古典文学翻訳事典1』86ページ所収本の初版本である。

2 「平安文学翻訳史年表」(「海外源氏情報」URL: http://genjiito.org/heian_ltrt/heian_history/、2017年1月13日閲覧)

(2) Frank James Daniels (フランク・ジェームズ・ダニエルズ) 訳

書名	<i>Seimei o yobarete kusainagi o iarawasu monogatari, Oomino kuni no Sinohara no tukaana ni iru otoko no monogatari, Hanazakura oru syoosyoo</i>
掲載誌	Selections from Japanese literature, 12th to 19th centuries
出版社	L. Humphries
刊行年月日	1953 年
再版・重版	1958 年、1959 年、1975 年
底本	『日本古典文学大系 22～26 今昔物語 1～5』(岩波書店、1959～1963 年) ※底本は内閣文庫蔵本
翻訳の範囲	巻 24 - 34、28 - 44
翻訳の特徴	翻訳は 2 部構成になっており、PART1 は底本が縦書きに記載され、その下に固有名詞などが脚注で説明されている。PART2 では本文をローマ字表記にしたものに対応するように翻訳がなされている。底本に忠実な翻訳である。
備考	『堤中納言物語』「花桜折る少将」の翻訳も掲載されている。

(3) Stanley Wilson Jones (スタンレー・ウィルソン・ジョーンズ) 訳

書名	<i>AGES AGO (今昔) : Thirty-seven Tales from the Konjaku Monogatari Collection</i>
出版社	Cambridge, Mass, Harvard University Press
刊行年月日	1959 年
再版・重版	2013 年
底本	芳賀矢一纂訂『攷証今昔物語集』(富山房、1913～1921 年)
翻訳の範囲	巻 2 - 20、3 - 14、4 - 9・40、5 - 13・14・20・24・25・32、6 - 2・3、9 - 2・11、10 - 7・9・13・21、23 - 19・22・23、24 - 4・5・8・20・26、25 - 4、26 - 2・7・11、27 - 5・21、28 - 3・34、29 - 32、31 - 9・27
翻訳の特徴	抄訳
備考	『日本古典文学翻訳事典 1』82 ページ

(4) Hiroshi Naito (内藤弘) 訳

書名	<i>LEGENDS OF JAPAN</i>
出版社	Charles E. Tuttle
刊行年月日	1972 年
再版・重版	ナシ

底本	不明
翻訳の範囲	巻 16 - 15・28・32、20 - 2・9・13・39、23 - 20・22、26 - 7・9、27 - 5、28 - 31・40、29 - 35、30 - 5、31 - 14・34
翻訳の特徴	抄訳
備考	『日本古典文学翻訳事典 1』89 ページ、『徒然草』も掲載されている。

(5) William Ritchie Wilson (ウィリアム・リッチー・ウィルソン) 訳

書名	<i>Konjaku Monogatari-shû: Toward an Understanding of its Literary Qualities</i>
掲載誌	Monumenta Nipponica28-2
出版社	Sophia University
刊行年月日	1973 年
再版・重版	なし
底本	『日本古典文学大系 22 ~ 26 今昔物語 1 ~ 5』(岩波書店、1959 ~ 1963 年)
翻訳の範囲	※今回対象とする 23 巻の底本は、田村右京大夫旧蔵本である東大本乙、25 巻は林家旧蔵本である内閣文庫本 A である。
翻訳の特徴	巻 23 - 14、巻 25 - 1 ~ 14
備考	本文は底本に忠実である。登場人物や固有名詞の説明は脚注にあげ、まず漢字で表記し、その後に英語で説明を加えている。

(6) W. Michael Kelsey (W. マイケル・ケルシー) 訳

書名	<i>Konjaku Monogatari-shû: Toward an Understanding of its Literary Qualities</i>
掲載誌	Monumenta Nipponica30-2
出版社	Sophia University
刊行年月日	1975 年
再版・重版	1976 年 (University Microfilms International)
底本	『日本古典文学大系 22 ~ 26 今昔物語 1 ~ 5』(岩波書店、1959 ~ 1963 年)
翻訳の範囲	巻 19 - 1 ~ 4
翻訳の特徴	本文は底本に忠実である。和歌は分かち書きがされており、ローマ字と英語の対訳となっている。登場人物や固有名詞の説明は脚注にあげ、まず漢字で表記し、その後に英語で説明を加えている。
備考	本文は底本に忠実である。登場人物や固有名詞の説明は脚注にあげ、まず漢字で表記し、その後に英語で説明を加えている。

(7) Susan Matisoff (スーザン・マチソフ) 訳

書名	<i>The legend of Semimaru, blind musician of Japan</i>
掲載誌	Studies in oriental culture, no. 1
出版社	Columbia University Press
刊行年月日	1978 年
再版・重版	ナシ
底本	記載ナシ
翻訳の範囲	巻 4 - 4・24 - 23
翻訳の特徴	抄訳
備考	世阿弥作の謡曲や蟬丸伝説を広く扱っている。

(8) Marian Ury (マリアン・ユリー) 訳

書名	<i>Tales of times now past : sixty-two stories from a medieval Japanese collection</i>
出版社	University of California Press
刊行年月日	1979 年
再版・重版	1993 年
底本	『日本古典文学大系 22 ~ 26 今昔物語 1 ~ 5』(岩波書店、1959 ~ 1963 年)
翻訳の範囲	巻 1 - 1・8・11・18、2 - 1・21、3 - 14・18、4 - 9・24・34・41、5 - 2・13、6 - 34・35、7 - 18、9 - 4・44・45、10 - 1・8・12・13、11 - 3・4、12 - 28、13 - 10・39、14 - 3・5、15 - 28、16 - 17・20・32、17 - 1・2・44、19 - 8・24、20 - 35、22 - 8、23 - 14、24 - 2・23・24、25 - 11、26 - 9、27 - 15・22・29・41、28 - 5・11・38、29 - 18・23・28、30 - 5、31 - 7・31・37
翻訳の特徴	固有名詞や仏教用語は脚注で説明する。
備考	『日本古典文学翻訳事典 1』84 ページに解題が掲載されている。

(9) Yoshiko Kurata Dykstra (ダイクストラ好子) 訳

書名	<i>The konjaku tales : from a medieval Japanese collection</i>
シリーズ名	Intercultural Research Institute monograph series ; no. 25 ~ 27
出版社	Intercultural Research Institute, Kansai University of Foreign Studies Publication (関西大学国際文化研究所), Distributor, Maruzen Co. (丸善)
刊行年月日	1986 年
再版・重版	1998 年、2001 年

底本	『日本古典文学大系 22～26 今昔物語 1～5』（岩波書店、1959～1963年）
翻訳の範囲	巻 17-18、23～25
翻訳の特徴	底本に忠実な全訳である。
備考	『日本古典文学翻訳事典 1』80 ページに解題が掲載されている。

(10) Royall Tyler (ロイヤル・タイラー) 訳

書名	<i>Konjaku Monogatari</i>
出版社	Japanese Tales
刊行年月日	PantheonBooks
再版・重版	1987年
底本	ナシ
翻訳の範囲	『日本古典文学大系 22～26 今昔物語 1～5』（岩波書店、1959～1963年）
翻訳の特徴	巻 11～17、19、20、23～31 から 100 話を取りあげる。

(11) Hiroaki Sato (佐藤紘彰) 訳

書名	<i>Legends of the samurai</i>
出版社	Overlook Press
刊行年月日	1995年
再版・重版	2012年
底本	『日本古典文学大系 22～26 今昔物語 1～5』（岩波書店、1959～1963年）
翻訳の範囲	本書第 1 部に巻 19-4、23-14、23-15、25-3～7・9・11・12、28-2 を掲載する。
翻訳の特徴	本文の前に説話の概略がおかれている。題名・本文ともに底本に忠実である。
備考	12 世紀の日本地図と清和源氏（清和天皇～源頼朝の世代）の系図を掲載する。また、挿絵として村上保による切り絵が使用されている。

(12) Charles De Wolf (チャールズ・デ・ウォルフ)、松原直子訳

書名	<i>Tales of days gone by : a selection from Konjaku Monogatari-shu</i>
出版社	ALIS
刊行年月日	2003年
再版・重版	ナシ

底本	『新日本古典文学大系 33～37 今昔物語 1～5』(岩波書店、1994年) ※底本は東京大学本である。
翻訳の範囲	巻 4 - 31、5 - 13、13 - 12、14 - 3・42、16 - 17、20 - 1、23 - 4・14・22、24 - 6・24、26 - 1・9、27 - 5、28 - 11
翻訳の特徴	底本に忠実である。
備考	『日本古典文学翻訳事典 1』87 ページに掲載されている。

(13) Naoshi Koriyama (郡山直) and Bruce Allen (ブルース・アレン)
訳

書名	<i>Japanese tales from times past : stories of fantasy and folklore from the Konjaku Monogatari Shu</i>
出版社	Tuttle publishing
刊行年月日	2015 年
再版・重版	ナシ
底本	『日本古典文学全集 21～24 今昔物語 1～4』(小学館、1999～1996年) 巻の順に記載。
翻訳の範囲	※底本は田村右京大夫旧蔵本と東京大学国語研究室蔵 21 冊本である。
翻訳の特徴	『今昔物語集』から 90 話を抄訳したものである。
備考	底本に忠実である。

❁ 3 兵に関する説話の一覧

平安時代最大の説話集である『今昔物語集』は、天竺部・震旦部・本朝仏法部・本朝世俗部に分けられ、「兵」に関する説話は本朝世俗部の巻 23-13～16 および巻 25 に配置されている。巻名のみを確認すると、平将門や源頼光といった桓武平氏と清和源氏の人物が登場する。特に巻 25 は清和源氏出身の人物が 8 人を占め、説話は系譜上、源満仲の息子である長男頼光・次男頼親と三男の頼信から孫の義家へと連なっていくという配列になっている。なお、登場する武人たちの系譜と巻 25 および本朝部の構想については、本科研の連携研究者である荒木浩³氏を

3 荒木浩「『今昔物語集』本朝部の構想—巻二十五「兵」譚の成立と「今」をめぐって」(『文学』第 2 巻第 2 号、岩波書店、2001 年 3-4 月) および同氏による「『今

じめ、広田徹⁴氏、佐藤哲⁵氏、蔦尾和宏⁶氏らの先行研究に詳しい。

ここでは、まず2であげた翻訳書籍のうち、巻23-13～16および巻25が翻訳されている書籍についてまとめてみたい。左から巻、巻名、2の書誌につけた番号、巻名の英訳タイトルをあげた。なお、2の書誌に関して、元になった底本はひとつではないものの、巻名は翻訳書籍において最も底本として用いられた、『日本古典文学大系22～26 今昔物語1～5』（岩波書店、1959～1963年）の目録によった。

巻	巻名	書誌	巻名の英訳タイトル
23-13	平維衡同致頼合戦 蒙咎語	(9)	HOW TAIRA NO KOREHIRA AND MUNEYORI FOUGHT AGAINST EACH OTHER AND WERE PUNISHED
23-14	左衛門尉平致経送 明尊僧正語	(8)	How Taira no Munetsune, Lieutenant of the Left Division of the Outer Palace Guards, Escorted High Priest Myōson
		(9)	HOW CAPTAIN TAIRA NO MUNETSUNE OF THE GUARDS OF THE LEFT ESCORTED SOJO MYOSON
		(12)	A Warrior undertakes a Night Errand
23-15	陸奥前司橘則光切 殺人語	(1)	THE STORY OF HOW THE FORMER PROVINCIAL OFFICIAL OF MUTU, TATIBANA NORIMITU, CUT SOME MEN DOWN AND KILLED THEM
		(9)	HOW TACHIBANA NO NORIMITSU, EXGOVERNOR OF MUTSU, KILLED MEN
23-16	駿河前司橘季通構 逃語	(9)	HOW TACHIBANA NO SUEMICHI, FORMER GOVERNOR OF SURUGA PROVINCE ESCAPED BY A RUSE

昔物語集』本朝部の構想—巻二十五「兵」譚の成立と「今」をめぐる（承前）」（『文学』第2巻第3号、岩波書店、2001年5-6月）

4 広田徹『今昔物語集』にみる兵の系譜—特に巻二十五を中心に—（『國學院雑誌』70-3、國學院大學出版部、1969年3月）

5 佐藤哲「今昔物語集における「兵ノ家」の位置—巻二十五の構成意識を中心として—」（『語文』第72輯、日本大学国文学会、1988年12月）

6 蔦尾和浩『今昔物語集』の「兵」説話をめぐって—特に巻二十五構成論の試み—」（『國語と國文學』第909号、東京大学国語国文学会、1999年10月）

25-1	平将門発謀反被誅語	(5)	How Taira no Masakado Raised a Rebellion and Was Killed
		(9)	HOW TAIRA NO MASAKADO REVOLTED AND WAS KILLED
25-2	藤原純友依海賊被誅語	(5)	How Fujiwara no Sumitomo was Killed for Piracy
		(9)	HOW FUJIWARA NO SUMITOMO WAS KILLED ON ACCOUNT OF PIRATES
25-3	源宛平良文合戦語	(5)	How Minamoto no Mitsuru and Taira no Yoshifumi Did Battle
		(9)	ABOUT THE BATTLE BETWEEN MINAMOTO NO MITSURU AND TAIRA NO YOSHIFUMI
25-4	平維茂郎等被殺語	(3)	How Taira Koremochi Had a Retainer Killed on Him
		(5)	How a Follower of Taira no Koremochi was Killed
		(9)	HOW THE MEN OF TAIRA NO KOREMOCHI WERE KILLED
25-5	平維茂罰藤原諸任語	(1)	THE STORY OF TAIRA KOREMOTI CHASTIZED HUZIWARA MOROTANE
		(5)	How Taira no Koremochi Destroyed Fujiwara no Morotō
		(9)	HOW TAIRA NO KOREMOCHI ATTACKED FUJIWARA NO MOROTO
25-6	春宮大進源頼光朝臣射狐語	(5)	How the Noble Minamoto no Yorimitsu, Third-Grade Official in the Crown Prince's Palece, Shot a Fox
		(9)	HOW ASON MINAMOTO NO YORIMITSU, AN OFFICER OF THE OFFICE OF THE CROWN PRINCE, SHOT A FOX
25-7	藤原保昌朝臣值盜人袴垂語	(5)	How the Noble Fujiwara no Yasumasa Faced Down the Bamdit Hakamadare
		(9)	HOW ASON FUJIWARA NO YASUMASA MET HAKAMADARE,THE THIEF
		(13)	Fujiwara no Yasumasa Meets a Notorious Bandit Named Hakamadare

25-8	源頼親朝臣令罰清原口語 (本文欠)	(5)	How the Noble Minamoto no Yorichika Had Kiyowara no (Munenobu) Punished. [text missing]
		(9)	HOW ASON MINAMOTO NO YORICHIKA [LACUNA] KIYOHARA NO [LACUNA] ※ LACUNA は脱落の意味
25-9	源頼信朝臣責平忠恆語源頼信朝臣責平忠恆語	(5)	How the Noble Minamoto no Yorinobu called Taira no Tadatsune to Account
		(9)	HOW ASON MINAMOTO NO YORINOBU ATTACKED TAIRA NO TADATSUNE
25-10	依頼信言平貞道切人頭語	(5)	How Taira no Sadamichi Cut Off a Man's Head Because of a Word from Yorinobu
		(9)	HOW TAIRA NO SADAMICHI TOOK A MAN'S HEAD AT THE ORDER OF MINAMOTO NO YORINOBU
		(10)	AUTHORITY
25-11	藤原親孝為被捕質依頼信言免語	(5)	How a Child of Fujiwara no Chikataka, Having Been Seized as a Hostage by a Robber, Escaped Through a Word from Yorinobu
		(8)	How Fujiwara no Chikataka's Son Was Taken Hostage by a Robber and Freed Through Yorinobu's Persuasion
		(9)	HOW THE SON OF FUJIWARA NO CHIKATAKA, TAKEN AS A HOSTAGE, WAS FREED BY THE WORDS OF MINAMOTO NO YORINOBU
25-12	源頼信朝臣男頼義射殺馬盜人語	(5)	How Yoriyoshi, the Son of the Noble Minamoto no Yorinobu, Shot and Killed a Horse Thief
		(9)	HOW YORIYOSHI, A SON OF MINAMOTO NO YORINOBU, SHOT DOWN A HORSE THIEF
25-13	源頼義朝臣罰安陪くママ 貞任等語	(5)	How the Noble Minamoto no Yoriyoshi Chastised Abe no Sadatō and His Followers
		(9)	HOW ASON MINAMOTO YORIYOSHI KILLED ABE NO SADATO
25-14	源義家朝臣罰清原武衡等語 (本文欠)	(5)	How the Noble Minamoto no Yoshiie Chastised Kiyowara no Takehira and His People. [text missing]
		(9)	HOW ASON MINAMOTO NO YOSHIIE KILLED KIYOHARA NO TAKEHIRA AND OTHERS[lacuna]

❁ 4 翻訳からからみる兵～「兵」はどのように翻訳されているのか

武人をあらわす語と聞いて、思い浮かびやすい言葉は「侍」・「武士（ぶし／もののふ）」・「武者」・「兵（つわもの）」ではないだろうか。今回対象とする『今昔物語集』巻23－13～16および巻25の範囲における本文を確認すると、「武士（ぶし／もののふ）」という語は登場しない。「侍」は「侍共」（巻23－16）9例、「小侍」（巻25－4）1例の合計10例、「武者」は巻25－4の1例であり、武人をあらわす語として最も多いものは「兵」の84件である。その「兵」という語を辞書で確認してみると、大きく5つの意味があることがわかる。

兵（つわもの）

- 1 戦いに用いる道具。武器。武具。広義には兵糧（ひょうろう）などをも含む。また、それをを用いるわざ。武芸。武術。
- 2 戦場などで、武器を使用する人。いくさびと。兵。兵士。軍人。
- 3 勇ましく強い武人。勇敢な軍人。猛者（もさ）。
- 4 3から転じて日常生活の態度が堂々としてものに動じない人。信頼できる人。また、自分の所信をまげない人。強情な人。
- 5 ある方面で、よくも悪くも普通以上の働きをする人。

（『日本国語大辞典』第9巻 p.502、第二版）

※ちなみに『国史大辞典』では「武士」（12-127）、「武者」（13-613）として立項されている。

上記4と5の意味の初出は近世以後であることから、今回とりあげる範囲の説話で登場する「兵」とは、1～3の意味であると思われる。それでは『今昔物語集』巻23－13～16および巻25について、「兵」はどのような翻訳がされているのであろうか。上記の1～3の意味に対応する英訳について見てみたい。

(1) 「武勇」・「武芸」という意味で翻訳されているもの

「兵」という語のうち、3件は1にあげた「武勇」(1件)・「武芸」(2件)といった意味で使われている。いずれも「兵」という単体の表記ではなく「兵ノ道」としての形となっている。

◎兵ノ道 1-1

本文	此ノ二人、兵ノ道ヲ挑ケル程ニ、互ニ中悪シク成ニケリ。(巻25-3、p.368)
現代語訳	この2人はお互いに武勇を競っていたものの、しだいに仲が悪くなっていった。
英訳 (5)	In the course of pursuing <u>the Way of the Warrior</u> , these two men came to be on bad terms with each other. (p.197)
英訳 (9)	The two had long competed against each other valorously and gradually became unfriendly. (p.391)

英訳(5)の「the Way of the Warrior」は直訳すると「兵士の道」となる。「兵士の道」の中には、武勇や武芸といった意味も内包していると思われるものの、「兵ノ道」を本文にある言葉をそのままに翻訳していると言える。一方、英訳(9)は「兵ノ道」にあたる語を翻訳せずに、「互いに激しく競争し、だんだんと仲が悪くなっていった」としている。

◎兵ノ道 1-2

本文	而ルニ、露、家ノ兵ニモ不劣トシテ、心太ク、手聞キ、強力ニシテ、思量ノ有ル事モ微妙ナレバ、公モ此ノ人ヲ兵ノ道ニ被ル仕ニ、聊心モト无キ事无キ。(巻25-7、p.384)
現代語訳	しかし、武家出身の武人にも劣らず、肝が太く、腕が立って力が強く、思慮深いので、朝廷もこの人を武芸の方面で仕えさせていたものの、少しも心もとないということとはなかった。 ※この人とはこの説話の主人公「藤原保昌」のことである。
英訳 (5)	However, he was not in the slightest degree inferior to such a warrior. He was bold in spirit, skilled with his hands and great in strength. His judgement was good, and even the Central Government was never in the least dissatisfied with <u>his services as a warrior</u> . (p.212)
英訳 (9)	However, being as strong, brave and intelligent as a fine warrior, Yasumasa served at <u>the field of military arts</u> , and had never failed in his duties. (p.408)
英訳 (13)	But because he was strong, skillful, and thoughtful as any man from a military family, the imperial court used him in <u>the field of military affairs</u> , where he was perfectly reliable. (p.184)

英訳 (5) の「his services as a warrior」を直訳すると「兵士としての働き」となる。英訳 (9) および (13) では「military」いう語が使われており、(9)「the field of military arts」および (13)「the field of military affairs」を直訳すると「軍事分野」となる。「武人の家柄ではない藤原保昌が才能をかわれて、武芸の方面で朝廷に仕えていた」という本文からは、(5) の「his services as a warrior」よりも (9)「the field of military arts」と (13)「the field of military affairs」の翻訳の方が本文の意味や背景に近い翻訳と言える。

(2) 「武器を使用する人」・「兵士」・「軍人」の意味で翻訳されているもの

「兵」という語のうち、大多数が「武器を使用する人」・「兵士」・「軍人」の意味で用いられている。この他の 80 例について単語のみを抜き出してみる、巻 23-13～16 のうち、本文では「兵」という語が 5 例ある。この語に登場する説話を収録している書籍は、書誌データの (1)、(8)、(9)、(12) である。巻 23-15 に「兵ノ家」として、英訳 (1) に「military house」、英訳 (9) に「samurai family」という語が登場する以外は、全て「warrior」と翻訳されている。なお、「兵ノ家」の定義については辞典に掲載されている意味をもとに「武人の家」(先祖代々、世襲をしている武士)として考えた。

◎「兵ノ家」

本文	兵ノ家ニ非ネドモ、心極テ太クテ思量賢ク、身ノカナドゾ極強カリケル (巻 23-15、p.249)
現代語訳	武人の家の出身ではないものの、きわめて肝が座っていて思慮深く、腕力などがとても強かった。
英訳 (5)	Although the was not of a <u>military house</u> , he was extremely atouthearted, or shrewd judgment, and physically very strong. (p.526)
英訳 (9)	Although not of a <u>samurai family</u> orimitsu was strong, courageous, and intelligent. (p.256)

巻 25 の本文には「兵」という語が 75 例あり、この語に登場する説話を収録している書籍は、書誌データの (1) (3) (5) (8) (9) (12)

(13) の 6 種類の書籍である。各書籍において本文で「兵」となっている箇所を確認すると「warrior」、「soldier」、「army」の 3 つの語を用いて翻訳がされていることが多い。このうち英訳 (5) は上記の 3 つの語に「party」を加え、英訳 (9) は、「samurai」を加えた 4 つの語を用いて翻訳されている。

6 種類の書籍の本文を古典の本文と照らし合わせてみると、特定の人物をさす場合や 1 人、2 人といった少ない人数をあらわすときは、「warrior」という語が使われており、英訳本文で一番広く使われている言葉である。また、全体的にみると、「soldier」は単数・複数どちらも存在するものの、「his soldiers」のように複数の兵士をさす場合が多い。「warrior」と「soldier」について『オックスフォード現代英英辞典』⁷で意味を確認してみると、以下のような説明がされている。

◎ warrior (p.1458)

1 (especially in the past) a person who fights in a battle or war

2 (in compounds) (often disapproving) a person who leads or takes part in a campaign for a political or social cause, especially in an aggressive way that other people disapprove of

◎ soldier (p.1757 ~ 1758)

a member of an army, especially one who is not an officer

これらの意味によると、「warrior」は特に過去の人物である兵士をさし、「soldier」は将校ではない兵士のことをいう際に使用されることがわかる。「warrior」が本文で使われている箇所をみると、この説話の時点で過去である、一条天皇の治世で生きていた平維衡という武人についての説明がされており、辞典にあるように過去の人物である兵士（武人）をさしている。また、維衡は下野守であったので、一兵卒とは言えない。この点でも「soldier」ではなく「warrior」である。

7 オックスフォード大学出版部編『オックスフォード現代英英辞典 第9版』(旺文社、2015年)

本文	今昔、前ノ一條院天皇ノ御代ニ、前下野守平維衡ト云兵有リ。(巻 23-13、p.246)
現代語訳	今となつては昔のことであるものの、前の一条天皇の御治世に、前の下野守平維衡と言う <u>武人</u> がいた。
英訳 (9)	Long ago, during the reign of Emperor Ichijo, a <u>warrior</u> called Taira no Korehira, a former governor of Shimotsuke, (以下略、p.253)

一方、「soldier」は下記の例にあげた「Yogo's soldiers」として用いた場合、余五こと平維茂が集めた軍勢をひとまとまりでさす。さらに官職や姓名を記されていないため一般の兵士をさしていることがわかる。

本文	集タリケル兵共モ暫コソ養ケレ、遙ニ久ク成ケレバ、各「要事有」ナド云テ、皆本国ニ返リヌ。(p.375)
現代語訳	集まってきた重兵たちもしばらくの間は余五(維茂)を取り巻いて布陣していたものの、時間がたつにつれて、それぞれ、「重要な用件があるので」などと言って、国へ帰ってしまった。
英訳 (9)	<u>Yogo's soldiers</u> stayed with him for a while, but later some returned home, (以下略、巻 25-5、p.398)

しかし、『今昔物語集』本文と英訳を照らし合わせてみると、下記のように、ひとつの説話の中で語の使い方に対する統一は厳格にされていない箇所もある。

本文	秀郷等多ノ兵ヲ具シテ、行向ニ、新皇大キニ驚テ兵引具シテ向フ。(巻 25-1、p.365)
現代語訳	秀郷たちが大軍を率いてやってきたので、新皇(将門)は非常に驚き兵士たちを率いて向かって行った。
英訳 (5)	As Hidesato and <u>his party</u> set out against him with many warriors, the New Emperor was greatly surprised and led <u>his soldiers</u> to face them. (p.194)
英訳 (9)	At the news, the surprised Masakado led <u>his soldiers</u> to cope with Hidesato and his warriors. (p.388)

次に「warrior」と「soldier」以外の語をみると、「army」には「United States Army (アメリカ陸軍)」のような、複数の兵士が集まった特定の組織をさす言葉がある。このように、翻訳書籍の本文でも「the army of Yorinobu (頼信の兵)」などの形で特定の人物が率いる兵士の集団をさすことが多い。

今回とりあげた翻訳書籍の該当部分での使用頻度が少ない「samurai」

は、複数の兵士をさすのではなく特定の人物について「武人」であることを強調する際に用いられている。上記の例にあげた「his party (彼の軍勢、ここでは秀郷の軍勢)」の「party」も使用頻度は少ないものの、「Yogo's soldiers」のように兵士個々の官職や姓名をあげずに秀郷が率いている軍勢をひとまとめとして考えている。

また、本文に「兵」という語がある場合でも、前後関係で話の展開が明らかであるときは「兵」という語を翻訳していない場合もある。以下にその例を2つあげる。

◎「兵」という語を翻訳せず「men」としている例

本文	軍ノ員ヲ計フレバ、馬ノ兵七十余人、歩兵卅余人、合テ百餘人ゾ集レル。(巻 25-5、p.379)
現代語訳	軍兵の数を数えると、騎馬の兵士が七十余人、歩兵三十余人、あわせて百余人が集まった。
英訳 (5)	As to his war-band, there were more than <u>seventy mounted men and thirty on foot</u> ; in all some hundred men were assembled. (p.207)
英訳 (9)	Counting his men, Yogo found that he had gathered over a hundred, including more than <u>seventy mounted men and thirty some footmen</u> . (p.402)

◎翻訳せず省略している箇所としては、「◎兵ノ道 1-1」にあげた「英訳 (9) The two had long competed against each other valorously and gradually became unfriendly. (p.391)」をあげることができる。

古典の本文では「兵」となっている箇所を現代語に訳した際に、「兵士」や「武人」という訳になる場合でも、英語に翻訳される際は日本語以上により厳密に翻訳されている箇所がある。しかし、その反面で全ての英訳された翻訳書籍にそういった翻訳意識があるとは言い切れない。

❁ 4 翻訳からみる武具とその周辺の語

武具とは戦いに用いる道具のうち、特に鎧・兜などをさすものであるものの、実際には数多くの武具が存在し、言葉とその意味だけでは想像することが難しいものが存在する。そのため、想像がすることが難しいと思われる武器については、国文学研究資料館の館蔵和古書データベー

スで公開されている、元文5（1741）年に刊行された『本朝軍器考集古図説』⁸（ほんちょうぐんきしゅうこずせつ・請求記号：96-722-11～14）、天保14（1843）年に刊行された『武器袖鏡』⁹（ぶきそでかがみ・請求記号：ラ8-14-1～2）、嘉永元（1848）年に刊行された『武器叢図』¹⁰（ぶきにひやくず・請求記号：MY-1473-3）画像のコマ番号を掲載する。2016年10月から所蔵先が「国文学研究資料館」となっている文献については、オープンデータとして使用できるようになった。しかし、今回は分量と時間の関係上、図を掲載することはできなかったため、適宜参照してほしい。

『本朝軍器考集古図説』とは新井白石（1657～1725）が編纂した『軍器考』の図解書として、弟子の朝倉景衡（1660～1753？）が編集し、蜂谷広成が絵を描いた武器に関する有職書である。新井白石は幕府に仕えた朱子学者であり、『折たく柴の記』などを残した。朝倉景衡は水戸藩出身の国学者であり、義兄である白石に師事した。

『武器紐鏡』とは、江戸時代の故実家である栗原信充¹¹（1794～1870）により編纂された武器に関する有職書である。弓矢などの武器の説明とともに図が掲載されている。信充は平田篤胤に国学を屋代弘賢に有職故実を学び、武家故実に関する著作が多い。

『武器叢図』（武器二百図）とは、小林祐猷の画と山脇正準（1809～1871）の校閲による武器と武家の生活用品について、名称と絵図を掲載した書物である。子ども向けの書物で色がついており、切り取るとカルタにもなる。校閲をした山脇正準は江戸末期の武士で兵学者であった人物である。なお、「征箭」（そや）に関しては国文学研究資料館から公開されている、『貞丈雑記』で有名な伊勢貞丈（1718～1784）の『軍

8 『本朝軍器考集古図説』（国文学研究資料館 館蔵和古書データベース、URL:http://base1.nijl.ac.jp/infolib/meta_pub/G0001401KTG、2017年1月31日閲覧）

9 『武器袖鏡』（国文学研究資料館 館蔵和古書データベース、URL:http://base1.nijl.ac.jp/infolib/meta_pub/G0001401KTG、2017年1月31日閲覧）

10 『武器叢図』（国文学研究資料館 館蔵和古書データベース、URL:http://base1.nijl.ac.jp/infolib/meta_pub/G0001401KTG、2017年1月31日閲覧）

11 「栗原信充」（『国史大辞典 第4巻』p.394～395、吉川弘文館、1984年）

用記』¹²（土佐山内家宝物資料館蔵、99－626－1）のコマ番号を掲載した。「鞍の鳥付」に関連して、「鞍」の図は同じく国文学研究資料館から公開されている、伊勢貞丈の『鞍由来記』¹³（愛知県西尾市岩瀬文庫蔵、214－271－4）のコマ番号を掲載した。

以下、武具に関する語について、〔1〕体に身につけるもの〔2〕刀に関するもの〔3〕弓矢に関するものと、「兵」を扱う上では必須である〔4〕馬に関するもの（馬具）の4種類にわけて整理してみたい。

武具に関する語

〈1〉とりあげる語と読み方

〈2〉とりあげる語の意味

参照した文献は以下にあげる。

・『角川古語大辞典』（角川書店、1982～1999年）→引用する場合は「角川古語」と略する。

・『日本国語大辞典』（第二版、小学館、2000～2002年）→引用する場合は「日国」と略する。

・『国史大辞典』（吉川弘文館、1979～1997年）→引用する場合は「国史」と略する。

〈3〉本文：最も底本として用いられた『日本古典文学大系 22～26 今昔物語 1～5』（岩波書店、1959～1963年）から引用する。

〈4〉現代語訳：稿者が作成したものである。

〈5〉該当する部分の英訳：「2 英訳『今昔物語集』の書誌」から、該当する本文を引用した。

12 『軍用記』（国文学研究資料館 館蔵和古書データベース、URL: http://base1.nijl.ac.jp/infolib/meta_pub/G0001401KTG、2017年1月31日閲覧）

13 『鞍由来記』（国文学研究資料館 館蔵和古書データベース、URL: http://base1.nijl.ac.jp/infolib/meta_pub/G0001401KTG、2017年1月31日閲覧）

〔1〕体に身につけるもの

[1-2] 腰宛

・腰宛（こしあて） 腰刀をさすために、鎧の上から腰に巻く帯皮。（新編¹⁴p.397 頭注）英訳では、「sword belt」（刀のベルト）および「the leather belt of his sword」（彼の刀の革製のベルト）となっている。（9）の訳「the leather belt of his sword」は「腰宛」の意味が伝わりやすい翻訳となっている。

本文	充亦取テ返シテ良文ガ取中ニ押宛テ射ルニ、良文箭ニ違テ身ヲ□ル時ニ、腰宛ニ射立テツ。（巻 25-3、p.369）
現代語訳	源充はまたとって返し、平良文の胴の中央に狙いを定めて矢を射ると、良文はさっと身をかわしたので、矢は刀の腰宛にあたった。（以下略）
英訳（5）	Mitsuru again pulled around and let off an arrow aimed at Yoshihfumi's middle; but Yoshifumi dodged the arrow by swaying his body and it struck his <u>sword-belt</u> . (p.198)
英訳（9）	Now Mitsuru turned back his horse, and released his arrow at Yoshifumi who quickly dodged [lacuna] to let the arrow hit <u>the leather belt of his sword</u> . (p.392)

[1-3] 綾藺笠、行膝

・綾藺笠（あやいがさ）男性が外出に用いた「いぐさ」で織られた笠の一種。かぶったまま馬に乗っても縁が邪魔にならず、武士に愛用された。（国史 1-318）英訳では「hat of woven rushes」（いぐさで織られた帽子）、「rush hunting-hat」（いぐさの狩猟用の帽子）、「woven hat」（織られた帽子）となっており、特に（5）に関しては、綾藺笠の意味が伝わりやすい翻訳となっている。

・行膝（むかばき）

（図）『武器箱図』15 コマ左

外出・旅行・狩猟の際に両足を覆うための布や毛皮のこと（国史 11-1018）英訳では「leggings」（レギンス）、「apron」（エプロン）、「skirt」（スカート）となっている。（1）の「leggings」は行膝の形状を考えると、現在流通しているものでは最も想像しやすい品物である。

14 『新編日本古典文学全集 今昔物語集 3』（初版、小学館、2001年）

本文	其ノ中ニ大ナル葦毛ノ馬に乗テ、紺ノ襖ニ歎冬ノ衣着タル者ノ、綾藺笠ヲ着テ、夏毛ノ行騰シタルナム、中ニ勝レテ主人ト見ヘ侍ツル。(巻25-5、p.379)
現代語訳	その中に大きな葦毛の馬に乗り、紺色の襖に山吹色の衣を着て、綾藺笠をかぶり、夏毛の行騰を付けた者が、特に群を抜いていて主将とお見受けしました。
英訳 (1)	Among then was one mounted on a gray horse and wearing a robe of yellow rose over the dark blue ō with a <u>hat of woven rushes</u> , and clad in leggings of summer fur, whosttod out from the rest and looked like their master" (p.560)
英訳 (5)	One of them is riding on a big gray horse.He's wearing a bright yellow robe over a dark blue under-robe a silk-lined <u>rush hunting-hat</u> and an <u>apron of spotted</u> deer summer skin. He stands out among them and seems to be the leader. (p.207)
英訳 (9)	Among them was riding a great white horse with dark hair on its belly. He wore a yellow robe over a dark blue one. He had a deer <u>skirt</u> and <u>woven</u> hat.The man appeared especially distinguished and we recognized him as the lord of the army. (p.403)

〔2〕 刀に関するもの

〔2-1〕 尻鞘

(図) 『武器袖鏡』 18 コマ左

・尻鞘（しりさや） 雨露や暑気を防ぐために太刀の鞘を包む毛皮の袋のこと。(日国 7-459、角川古語 3-354) 英訳では「a scabbard-cover of boarskin with the hair turned upwards」(髪の手が上向きになったイノシシの鞘の覆い)、「a sword in a scabbard of the rough hide of a wild boar」(野生のイノシシの粗い皮で作った鞘の剣) となり、「猪ノ逆頬ノ尻鞘」というものの説明が内包された翻訳となっている。

本文	猪ノ逆頬ノ尻鞘シタル太刀帯シテ (以下略、巻 23-15、p.251)
現代語訳	猪の毛皮の手毛逆立てたもので作った尻鞘をつけた太刀を帯び、(以下略)
英訳 (1)	Around his waist he had a long-sword in a <u>scabbard-cover of boarskin with the hair turned upwards</u> , (p.529)
英訳 (9)	The man was wearing plain trousers,a yellow kimono over a worn dark blue one,deerskin shoes, and a <u>sword in a scabbard of the rough hide of a wild boar</u> . (p.258)

[2-2] 股寄

・股寄（ももよせ） 太刀の鞘の峰の方をおおっている覆輪（縁をおおった金具）のこと。（国史 10-647、12-102）英訳では「scabbard of his long-sword」（彼の長い刀の鞘）、「the metalwork of the scabbard of his great sword」（彼の素晴らしい刀の金属加工）となっている。（5）には「鞘」に関する意味が入っており、（9）には「鞘」の意味が内包されずに刀の覆輪が金具であることに触れた翻訳となっている。

本文	良文充が最中二箭ヲ押宛テ、射ルニ、充馬ヨリ落ル様ニシテ箭二違ハバ、太刀ノ股寄ニ当ヌ。（巻 25-3、p.369）
現代語訳	平良文が源充の体の中央に狙いをつけて射ると、充はまさに馬から落ちそうになるくらいに体を倒して矢をはずしたので、太刀の股寄にあたった。
英訳 (5)	Yoshifumi aimed an arrow at Mitsuru's middle, but Mitsuru made as if to fall from his horse and the arrow missed, striking instead <u>the scabbard of his long-sword</u> . (p.198)
英訳 (9)	Yoshifumi squarely aimed at Mitsuru who dodged the arrow by lowering his body almost to the point of falling from his horse, and the arrow hit <u>the metalwork of the scabbard of his great sword</u> . (p.392)

[3] 矢に関するもの

[3-1] 雁脰

・雁脰（かりまた） 鎌の一種で先端が二股になっている。また鎌をつけた矢のことで、狩猟に使用される。（国史 2-874、「やじり」で立項 14-45）英訳では「an arrow with a forked head to his bow」（二股の頭をつけた彼の矢）、「his forked arrow」（彼の分岐した矢）となり、二股に分かれた鎌がついた矢の形状が伝わる翻訳となっている。

本文	充楯ヲ離レテ只一騎出来テ、雁脰ヲ番テ立テリ。（巻 25-3、p.369）
現代語訳	源充は楯があるところを離れて、ただ一騎で出てきて、雁脰の矢の矢筈を弓の弦にかけて立った。
英訳 (5)	Mitsuru rode out from the line of shields and fitted <u>an arrow with a forked head to his bow</u> . (p.198)
英訳 (9)	Mitsuru left his soldiers, rode out alone and took his position, fixing <u>his forked arrow</u> . (p.392)

[3-2] 墓目、征箭

(図) 『本朝軍器考集古図説』 34 コマ右

・墓目／響目（ひきめ） ここでは鳴矢（なりや）という射技に用いた大鐙（おおかぶら）という一種（国史 13-720）ではなく、卵形をした桐などの木のかたまりを空洞にしたもの。音を立てて空中を飛ぶことから魔除けにされたものをさす。（新編¹⁵p.419 頭注）英訳（5）では「a bulb-headed practice arrow」（電球型の練習用の矢）、（9）では「this arrow」（この矢）と翻訳されており、（5）の「電球型」は墓目の形状をよく表現した訳となっている。

(図) 『軍用記』 152 コマ左

・征箭（そや） 軍陣用の矢で、征討の矢として征矢と書く。（国史 8-666、14-47）英訳では「regular war-arrows」（通常、戦争に使う矢）、「An arrow for the battlefield」（戦場で使う矢）となり、どちらも本文の意味を的確に表現した翻訳となっている。

本文	「カノ候ハバゴソ仕り候ハメ。此ク遠キ物ハヒキメハ重ク候フ。征箭 シシゴソ射候へ、ヒキメハ更ニ否ヤ不射付候ラム。（以下略、巻 25-6、 p.381）」
現代語訳	「弓に力さえありますれば、射あててご覧にいれましょう。このように 遠い的には墓目は重うございます。普通の矢なら射ることができます ものの、墓目では少しも射付けることができないだろうと存じます。（以 下略）」
英訳（5）	“If I have the strength, I will probably be able to do it. But a <u>bulb-headed practice arrow</u> is too heavy for a thing so far away as that. Now I've shot with <u>regular war-arrows</u> , but it is highly unlikely that I'll be able to shoot and hit with a practice arrow.（以下略、 p.210）
英訳（9）	“If I still have the power, I will be able to show you my ability. besides, this arrow is too heavy to shoot an object at a distance. <u>An arrow for the battlefield</u> should be more suitable.（p.405 ~ 406）

15 脚注 14 と同じ出典である。

[3-3] 胡籛

(図)『武器箱図』6コマ左

・胡籛／胡録（やなぐい）矢を納めて持ち運ぶ器具のこと。（国史 13-768）英訳では「quiver」（籛）と「arrows」（矢）と翻訳されており、英訳（9）には矢を納めて持ち運ぶという意味は内包されていない。

本文	致経、其ノ由ヲ承テ、常宿直處ニ弓・胡籛を立、(巻 23-14、 p.247)
現代語訳	致経は常日ごろ宿直所に弓・胡籛を立て、(以下略)
英訳 (5)	In the barracks he always kept bow and <u>quiver</u> in readiness, (以下略、 p.139)
英訳 (9)	Munetsune always kept his bow and <u>arrows</u> in his livingquarters, (以下略、 p.254)

[4] 馬に関するもの（馬具）

[4-1] 鞍の鳥付

(図)『鞍由来記』8コマ左と9コマ右

・鞍の鳥付（くらのとりつけ）「取付」（とっつけ・日国 9-1262）と同じ意味で、鞍の後輪（しずわ）にある鞆（しほで）という部分につけた紐のことである。（日国 9-1415）図によると、鞆の名称は前輪の項目に記載がある。英訳（1）（5）（9）では全て「saddle」（鞍）と「tie it」・「it tied」という語を使って、「鞍に結びつける」という意味に内包している。

本文	然テ其ノ餘五ガ頭ヲ慥カニ取テ、鞍ノ鳥付ニ結付給ヘリヤ、何ゾ」ト。 (巻 25-5、 p.376)
現代語訳	ところで、その余五の首は確かに取って鞍の後輪に、結びつけなされたのか、いかがか
英訳 (1)	Now then, as for that Yogo's head, you were careful to take it and <u>tie it to the buckle of your saddle</u> , weren't you ? (p.554)
英訳 (5)	You probably took his head and <u>tied it to your saddle</u> , didn't you ? (p.204)
英訳 (9)	Have you surely taken Yogo's head and brought <u>it tied to your saddle</u> ? (p.400)

[4-2] 鐙

(図) 『武器袖鏡』 37 コマ左～ 39 コマ右

・ 鐙（あぶみ） 乗馬に際して、足をかけるところと、騎馬をする際に安定を保つための踏張りという二つの機能をもつ馬具の一種である。(国史 1-263) 英訳では「stirrups」（鐙）となり、本文の意味を保った訳となっている。

本文	尻答ヌト聞クニ合セテ、馬ノ走テ行ク。鐙ノ人モ乗セヌ音ニテ、カラカラト聞ケレバ、(以下略、巻 25-12、p.394)
現代語訳	(頼信は) 手応えがあったと聞くと同時に、走っていく馬の鐙が人の乗らぬ音でからからと聞こえたので、(以下略)
英訳 (5)	he immediately knew that the shot had taken effect for they heard the clattering sound of riderless <u>stirrups</u> as a horse ran off. (p.221)
英訳 (9)	Then they heard the noise of a horse running away with empty <u>stirrups</u> . Obviously, nobody was on its back any longer. (p.418)

❁ 6 おわりに

武人こと「兵」と戦いの世界を中心的に扱った軍記物語の翻訳は、『平家物語』や『太平記』をはじめ、数多く出版されている。英語だけでなくフランス語・スペイン語の翻訳書籍も存在し、抄訳だけでなく全訳も存在する。『今昔物語集』において今回対象とした範囲では、「武具」や「馬具」という古典特有の語があった。しかし、各国語訳『源氏物語』に登場する語を7種類の項目に分類し、検討を行ったときに比べて本文とかけ離れた翻訳は登場しなかった。

古典特有の語において武具や馬具の図を見てみると、細かいパーツが組み合わさって作り上げられていることがわかる。翻訳する際も、本文に登場する語やそれらを用いた表現が、武具や馬具そのものでなく、それらを構成するパーツに及ぶことも多い。翻訳者にとって、そういった場合は説明を内包させた訳を作る必要があり、まして重訳ではなく古典の本文から翻訳することは並大抵のことではない。今回は、『今昔物語集』に所収されている武人に関連する説話と、その中に登場する古典特有の

表現を見てきたものの、範囲を限定したために、少ない用例の中からの紹介と検討になってしまったことも否めない。今後、機会があれば、範囲を広げて検討・考察に取り組みたいと考えている。

(国文学研究資料館・研究員)

科研活動報告





加々良 恵子
(かから けいこ)

1. 海外源氏情報 (<http://genjiito.org/>) 運用報告

▶ サイト利用状況

(1) アクセス数 (2014/11 ~ 2016/12)

2014年度	2014/11	2014/12	2015/01	2015/02	2015/03	
総アクセス	2016	2294	2329	3681	3009	
(国内)	1535	1554	1800	1081	1654	
(海外)	571	740	529	2600	1355	
2015年度	2015/04	2015/05	2015/06	2015/07	2015/08	2015/09
総アクセス	2210	2250	3452	3937	1746	2213
(国内)	1399	1553	1566	2469	1288	1307
(海外)	811	697	1886	1468	458	906
	2015/10	2015/11	2015/12	2016/01	2016/02	2016/03
総アクセス	4274	5214	2698	3441	2835	2501
(国内)	3110	4050	1345	2127	1651	1598
(海外)	1164	1164	1353	1314	1184	903
2016年度	2016/04	2016/05	2016/06	2015/07	2016/08	2016/09
総アクセス	2824	5151	3206	3387	3087	2845
(国内)	1999	2016	994	1175	2016	1817
(海外)	825	3135	2212	2212	1071	1028
	2016/10	2016/11	2016/12			
総アクセス	6770	8935	11263			
(国内)	6055	7939	10033			
(海外)	715	996	1230			

(2) 年度別月間平均アクセス

	2014年度	2015年度	2016年度
総アクセス	2470	3064	5274
(国内)	1649	1955	3783
(海外)	830	1109	1492

(3) 事典／ジャーナルダウンロード数 (2017年3月3日現在)

	日本古典文学翻訳事典		ジャーナル				
	1	2	1号	2号	3号	4号	5号
2014年度	34	-	24	7	-	-	-
2015年度	107	-	87	50	95	-	-
2016年度	15	36	50	29	43	64	52
合計	156	36	161	86	138	64	52

2. データベース登録情報

(1) 翻訳された源氏物語・古典文学についての論文

①データベース登録数 514件

②翻訳言語別内訳

(※複数の翻訳文学に触れている論文を含むため、合計数は①と一致しない)

	数	左で触れられていた現代語訳者・翻訳者
英語	264	A・L・サドラー、B・ワトソン、E・A・克蘭ストン、
中国語	53	G・ボノー、L・ゾルブラッド、W・G・アストン、アーサー・
フランス語	48	ウェイリー、アイヴアン・モリス、アドリアナ・モッティ、
指定なし	46	アレクサンデル・N・メシチェリヤコフ、アレクサンド
ドイツ語	25	ル・ドーリン、アントニオ・ガベザス・ガルシア、イリナ・
韓国、朝鮮語 (ハングル)	22	メリニコワ、ウィリアム・マッカラ、ヴェーラ・マルコワ、
ロシア語	21	エヘテシャーム・フセイン、オスカー・ベンル、ガブリエ
スペイン語	9	エーレ・ダンヌンツィオ、キャロル・ホクステッドラー、
現代語	7	キューネル、ケネス・レオ・リチャード、サイデンステッ
イタリア語	6	カー、ジェーン・ハーシュフィールド、シャーロット・
ウルドゥー語	3	オルダーディッセン、ジャルガルサイハン・オチルフ、
チェコ語	3	ジュディット・ゴーチエ、ジョン・C・カーン、ステー
ビルマ(ミャンマー)語	3	ブン・カーター、ソーニャ・アンツエン、タチアーナ・
ポルトガル語	2	サカロヴァ・デリューシナ、ニコライ・ヨシフォヴィ
各国語	2	チ・コンラド、ベルナル・フランク、ヘレン・クレイグ・
インド諸語	1	マッカラ、ホルディ・マス・ロベス、ホルヘ・ソロモ
スウェーデン語	1	ノフ、マリア・テレサ・オルシ、ミシェル・ルヴオン、
トルコ語	1	メレデス・マッキニー、ヤマタ・キク、ヨハン・マリア・
ハンガリー語	1	奥野、ランゲ、リチャード・パウリング、リュドミーラ・
ヒンディー語	1	エルマコーワ、ルネ・シフェール、ローレル・ロッド、
ベトナム語	1	ロイヤル・タイラー、ロンメル、与謝野晶子、佐藤恵子、
モンゴル語	1	周作人、土居光知、大森安仁子、姚継中、島田正三(眞造)、
沖縄方言	1	末松謙澄、本多平八郎、朴光華、李美淑、李芒、村上明香、
		林文月、柳呈、楊烈、猪瀬博子、田沼新、畠山大二郎、
		緑川眞知子、翻案、菊池智子、西園寺公望、谷崎潤一郎、
		豊子愷、鄭民欽、金蘭周、銭稻孫、長谷川誠治

(※「指定なし」は、翻訳状況全般や世界の情勢に触れているなど、特定の言語を取り扱っていないもの)

(2) 海外で発表された源氏物語・古典文学についての論文 716 件

①執筆言語別内訳（※海外で発表された日本語の論文を含む）

	数
韓国、朝鮮語（ハングル）	364
日本語	132
英語	92
中国語	85
ロシア語	14
フランス語	9
ポーランド語	5
チェコ語	3
ドイツ語	2

(3) 海外で翻訳・出版された『源氏物語』情報 290 件

①翻訳言語内訳 33 言語

	数		数
英語	81	スウェーデン語	2
中国語	59	セルビア語	2
ハングル	22	タミル語	2
フランス語	21	ハンガリー語	2
スペイン語	15	マラヤーラム語	2
ドイツ語	14	リトアニア語	2
ロシア語	12	アラビア語	1
イタリア語	9	ウルドゥ語	1
オランダ語	6	オディア語	1
チェコ語	4	クロアチア語	1
フィンランド語	4	スロヴェニア語	1
ポーランド語	4	テルグ語	1
エスペラント	3	ベトナム語	1
パンジャービー語	3	ヘブライ語	1
ヒンディー語	3	ミャンマー語	1
ポルトガル語	3	モンゴル語	1
アッサム語	2		

(4) 海外で翻訳・出版された古典文学情報 575 件

①内訳 翻訳言語数 27 言語
 翻訳作品数 115 作品 (抄訳を含む)

②翻訳言語別内訳

	数		数
英語	280	ブルガリア語	2
ドイツ語	86	ポルトガル語	2
フランス語	66	アラビア語	1
ロシア語	39	ウクライナ語	1
スペイン語	30	カタルーニャ語	1
イタリア語	23	スロヴァキア語	1
中国語	18	セルビア語	1
韓国、朝鮮語 (ハングル)	8	デンマーク語	1
オランダ語	3	トルコ語	1
チェコ語	3	ベトナム語	1
ルーマニア語	3	ベンガル語	1
英語 (ローマ字)	2	ポーランド語	1
ギリシャ語	2	ラトビア語	1
ヒンディー語	2		

③年代別翻訳数内訳 (10 年ごと)

年代	翻訳数	作品数	言語数	初出翻訳言語
1870	3	3	2	英語・ドイツ語
1880	5	3	3	イタリア語
1890	3	3	1	
1900	2	2	1	
1910	5	12	2	フランス語
1920	18	14	4	ロシア語
1930	32	13	3	
1940	8	10	3	
1950	36	14	4	
1960	46	32	6	ポルトガル語
1970	85	51	8	ルーマニア語・中国語

1980	97	46	12	デンマーク語・スペイン語・チェコ語・ブルガリア語・オランダ語
1990	96	64	11	カタルーニャ語・ギリシャ語・スロヴァキア語
2000	101	41	14	ウクライナ語・トルコ語・ヒンディー語・ラトビア語・韓国、朝鮮語（ハングル）
2010	41	13	16	アラビア語・セルビア語・ベトナム語・ベンガル語・ポーランド語

（※ 2008 年は源氏物語千年紀が行われている）

④ 翻訳回数順位（10 位まで）

	作品数	回数	備考
1	枕草子	94	内訳：1 位ドイツ語、2 位英語、3 位ロシア語
2	古今和歌集	67	内訳：1 位英語、2 位フランス語、3 位ドイツ語
3	竹取物語	55	内訳：1 位ドイツ語・英語、2 位フランス語
4	今昔物語集	51	内訳：1 位英語、2 位フランス語、3 位ドイツ語
5	伊勢物語	45	内訳：1 位英語、2 位スペイン語、3 位フランス語
6	更級日記	38	
7	紫式部日記	35	
8	堤中納言物語	33	
9	和泉式部日記	33	
10	土佐日記	32	

- i) 単独タイトル発行

	作品数	回数
1	枕草子	81
2	古今和歌集	48
3	竹取物語	42
4	今昔物語集	40
5	伊勢物語	31
6	更級日記	17
7	土佐日記	16
8	蜻蛉日記	15
9	作庭記	14
10	落窪物語	13

- ii) 選集としての発行

	作品数	回数
1	紫式部日記	27
2	和泉式部日記	21
2	更級日記	21
4	堤中納言物語	19
5	古今和歌集	16
6	土佐日記	14
7	伊勢物語	13
7	竹取物語	13
9	枕草子	11
9	今昔物語集	11

- iii) 1冊のみ発行している言語で翻訳された作品

言語	回数
アラビア語	竹取物語
ウクライナ語	古今和歌集
カタルーニャ語	紫式部日記
スロヴァキア語	古今和歌集
セルビア語	枕草子
デンマーク語	浜松中納言物語
トルコ語	枕草子
ベトナム語	今昔物語集
ベンガル語	竹取物語
ポーランド語	作庭記
ラトビア語	枕草子

(※『源氏物語』を除く)

⑤参考（海外タイトルの一例）

諸言語	源氏物語	枕草子	古今和歌集	竹取物語
英語	Genji monogatari/The tale of Genji	The pillow-book of Sei Shōnagon/ The sketch book of the Lady Sei Shōnagon/The pillow book	Kokinshu/ Kokin-shū/The Kokin Wakashū/KOKIN WAKASHU	The old bamboo-hewer's/Taketori no okina no monogatari/ PRINCESS SPLENDOR The Wood-cutter's Daughter/The tale of the bamboo cutter/ The Tale of the Shining Princess/ The tale of the bamboo cutter/ Taketori monogatar
中国語	源氏物語 / 源氏物語	枕草子	古今和歌集	竹取物語
ハンガル	겐지 이야기 / 源氏物語 / 겐지모노가타리	枕草子		다케토리 이야기

諸言語	源氏物語	枕草子	古今和歌集	竹取物語
フランス語	Le Ghennji monogatari/Le Roman de Genji/ Le dit du Genji	Notes de chevet	KOKINNSHOU/ Le Kokinshû/ Kokin wakashû	TAKÉTORI MONOGATARI/ Conte du Cueilleur de bambous/le conte du Coupeur de Bambous/ Le coupeur de bambous
ドイツ語	Die Abenteuer des Prinzen Genji/Genji : die Geschichte vom Prinzen/Genji Monogatari/Die Geschichte vom Prinzen Genji	Das Kopfkissenbuch	Kokinwakashu/ Kokinshû	竹取物語 /Die Geschichte von Taketori/Die Jungfrau vom Geschmeidigen Bambus/ altjapanisches Märchen/Die Geschichte vom Bambussammler und dem Mädchen Kaguya/Die Geschichte vom Bambussammler/ Taketorimonogatari/ die Erzählung vom Bambussammler
ロシア語	Povest o Gendzi, Blistatelnom printse./Povest o Gendzi/Gendzi monogatari	Записки у изголовья/ Zapiski u lzgolovia	Кокинвакасю/ Kokinvakasiu	
スペイン語	Genji Monogatari/ Romance de Genji/La novela de Genji/La historia de Genji/ El relato de Genji	El libro de la Almohada	Kokinwakashû	El cuento del cortador de bambú

(5) 『十帖源氏』 情報

① 原本データベース 4 件

版本	書写時代	所蔵	備考
十帖源氏 (野々口立圃 / 九曜文庫)	江戸時代	早稲田大学	10帖。絵入 朱・墨書入あり。題簽を一部欠く。
十帖源氏 (野々口立圃)	江戸時代	早稲田大学	5冊。虫損あり。
国文研所蔵・公開 十帖源氏	江戸時代	国文学研究資料館	「十帖源氏」で検索のこと。 万治四刊ほか。
国立国会図書館 デジタルコレクション	江戸時代	国立国会図書館 (デジタル化出版者)	5冊

② 関連論文

年	タイトル	内容
1987	〈複〉十帖源氏 承応三年頃成・無刊記本 図録	掲載：日本書誌学大系 53-3
1992	近世源氏物語版本の挿絵 (清水婦久子)	掲載：講座平安文学論究 8
2000	源氏絵における天皇の描き方—近世初期の天皇表現の伝承について (山本陽子)	掲載：日本宗教文化史研究 4-1
2003	『十帖源氏』『おさな源氏』と無刊記本『源氏物語』一若紫巻の本文 (清水婦久子)	掲載：青須我波良 58
	特集・源氏的なもの 『十帖源氏』『おさな源氏』の本文—歌書としての版本 (清水婦久子)	掲載：文学 4-4
	立圃『おさな源氏』『十帖源氏』(湯浅佳子)	掲載：『源氏物語の変奏曲』 7
2004	十帖源氏攷 (中西健治)	掲載：立命館文学 583
2007	『源氏物語』図様の変容 (佐藤悟)	掲載：『江戸時代の源氏物語』(講座源氏物語研究) 5
2008	源氏絵の世俗化—伝菱川師宣画『おさな源氏』の成立背景 (阿美古理恵)	掲載：学習院大学人文科学論集 17
2009	菱川師宣における古典の享受と変容 (阿美古理恵)	掲載：浮世絵芸術 157
	『十帖源氏』から『おさな源氏』へ—その梗概化の方法・「未摘花」巻の場合 (石渡健児)	掲載：国学院大学大学院平安文学研究 1,
2010	研究ノート 中近世における古代寝殿造理解—理想の住宅像と考証研究 (赤沢真理)	掲載：国文研ニュース 19
2011	所収歌から見た『源氏物語忍草』の梗概方法 (須藤圭)	掲載：『源氏物語忍草の研究 本文・校異編論考編』
	〈翻〉『十帖源氏』試論 (菅原郁子)	掲載：『源氏物語本文の研究』 20,160-179p.

2013	「佐賀大学小城鍋島文庫『十帖源氏』の挿絵と覆刻」(沼尻利通)	掲載：『小城藩と和歌～直能公と『岡花二十首和歌』の里帰り～』 概略：四種類に分類される『十帖源氏』について重版・覆刻の状況を考察する。
2014	野々口立圃『十帖源氏』の初版と覆刻(沼尻利通)	掲載：『雅俗』第13号(雅俗の会) 概略：『十帖源氏』が同一の版木からの重刷であるか、中川文庫本・光丘文庫本などの諸本をとりあけて考察している。
2015	「第三章 野々口立圃作『十帖源氏』の本文構造」(菅原郁子)	掲載：『源氏物語の伝来と享受の研究』(武蔵野書院) 概略：初出〈翻〉『十帖源氏』試論(菅原郁子)『源氏物語本文の研究』20,160-179p.(2011年)

3. 科研の活動記録

2014年度	
2014/11/26	『海外平安文学研究ジャーナル』vol. 1.0 公開開始
2015/02/03	更新通知用のツイッター運用開始
2015/02/27	第5回「海外における平安文学」研究会報告
2015/03/11	『海外平安文学研究ジャーナル』vol. 2.0 公開開始
2015/03/25	「翻訳版『源氏物語』」情報公開開始
随時更新	論文検索データベース／翻訳史／平安文学関連サイトなど
2015年度	
2015/08/22	第6回「海外における平安文学」研究会報告
2015/09/30	『海外平安文学研究ジャーナル』vol. 3.0 公開開始
2015/10/7	『日本古典文学翻訳事典1』正誤表
2015/10/24～25	中古文学会・秋季大会でリーフレット配布
2016/02/26	第7回「海外における平安文学」研究会報告
2016/03/01	グロッサリー(ドラフト版)公開
2016/03/22	海外平安文学研究ジャーナル vol. 4.0 公開開始
随時更新	論文検索データベース／翻訳史／平安文学関連サイトなど
2016年度	
2016/06/18	第8回「海外における平安文学」研究会報告
2016/09/21	海外平安文学研究ジャーナル vol. 5.0 公開開始
2016/11/11～12	第8回「インド国際日本文学研究集会」(於：インド) ※共催
2016/12/22	日本古典文学翻訳事典2<平安外語編>
2017/03/30	日本古典文学翻訳事典2、海外平安文学研究ジャーナル vol. 1.0-3.0、vol. 4.0-6.0 発行(印刷)
	海外平安文学研究ジャーナル vol. 6.0 公開開始
随時更新	論文検索データベース／翻訳史／平安文学関連サイトなど

4. 翻訳された『源氏物語』の言語について

翻言語数：33

言語名：アッサム語（インド）・アラビア語・イタリア語・

ウルドゥー語（インド）・英語・オランダ語・オディア語（インド）・

クロアチア語・スウェーデン語・スペイン語・スロベニア語・

セルビア語・タミール語（インド）・チェコ語・中国語（簡体字）・

中国語（繁体字）・テルグ語（インド）・ドイツ語・トルコ語・

現代日本語・ハンガリー語・ハングル（韓国）・

パンジャービー語（インド）・ヒンディー語（インド）・

フィンランド語・フランス語・ベトナム語・ポルトガル語・

マラヤーラム語（インド）・モンゴル語・リトアニア語・

ロシア語・エスペラント

（国文学研究資料館 補佐員）